

史料と伊能図

伊能忠敬

研究



二〇〇三年 第三四号

伊能忠敬研究会

表紙図解説

米國議會図書館蔵

伊能大図一一七号の部分「伊勢」付近

第五次測量で測られた伊勢市の付近である。伊能隊は尾張から海岸線と街道を測りながら伊勢に着き、山田に五泊、宇治に三泊する。

ここにある測線は、ほとんど山田または宇治から通いで測定された。測量開始地点に着くまでの途中も結構大変だったろう。こういう道中はたぶん、忠敬は駕籠だった。

大湊の地形は、今では大分形が変わっているが、当時の大湊周辺がよく測られている。この図はすでに新聞発表したから御記憶の方も多いと思う。一一七号全体は非着色図であるが、この部分だけが着色されている。明治陸軍の関係者は、丁寧に測量され、細かく測線が描かれている大湊周辺図に忠敬の特別な想いを感じたのであろうか。

第五次測量では忠敬は、幕府測量隊として一七名の隊員を従えていた。個人事業の頃とは違って地元の支援も大きく、実力が大きくなっていたので、複雑な入り江も丁寧に計測された。その結果が大幅な日程遅れにつながり、三年くらいの予定で始めた西国測量が一年かかることになってしまった。

現在の大湊は、僅かの水路を残すのみであるが、かつては、このように大規模な良港であった。九鬼水軍の根拠地で、織田信長が毛利水軍を破った新兵器鉄甲船はここで建造されたという。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

(渡辺)

最新情報

目次 34号

伊能図新時代へのあしおと「伊能忠敬と日本図」編集部 一
第二回研修旅行から 編集部 四

「伊能忠敬研究会がゆく」大阪編 新沢 義博 六
お餅が大好きはざまさん・前田幸子 成家淑子 中川幸子 九

高橋至時と妻の「柿の木の挿話」と無量寺 荻原 哲夫 一〇

研究ノート
伊能古文書教室『旌門金鏡類録』(二) 小島 一仁 一四

忠敬と漢文の一紙 伊藤 栄子 一八
伊能忠敬と鳥取・智頭街道 田中 精夫 二四

芳名録より 伊能 陽子 二一
トピックス
交遊抄ーウオーキングー 田中 久義 一七

書評から「天と地を測った男」 産経 新聞 二〇
源空寺の忠敬墓碑銘拓本 伊能 陽子 三二

新収蔵伊能家史料を公開 伊能記念館 五四
ゼンリン「地図の資料館」オープン 石川 清一 六一

フランスのナンシーで見た象限儀 渡辺 一郎 六二
地域史料紹介

伊能隊に付き廻った村役人の記録ー高原文書 河島 悦子 三六
伊能忠誨日記(三) 佐久間達夫 四六

エッセー 三六日間で世界一周 渡辺 一郎 五六
支部便り 九州支部「たかが歩き・されど歩き」 原口 光和 六三

忠敬談話室だより 編集部 六四

伊能図新時代へのあしおと

東京国立博物館「伊能忠敬と日本図」展

今年10月31日から12月14日まで

東京国立博物館での地図展は開館以来はじめて。「沿海実測図の世界」「発見された小図、中図、東博にある伊能大図など」「北方図の世界」「日本のかたち」など話題がたくさん。平成館ロビーでは待望のアメリカ伊能大図が国土地理院の特別協力でいよいよフロア展示される。今回は東京から大阪までの約60面が公開される。期待したい。



新発見・初公開の伊能小図ほか東博所蔵の伊能図を一挙公開！

東京国立博物館には、江戸時代の測量家伊能忠敬が制作した実測図（伊能図）が多数所蔵されています。いずれも江戸幕府や大名家に伝わったもので、忠敬の測量技術の高い水準を示すとともに、絵画的な美しさもあわせ持っています。

この展覧会では、ふだん公開の機会が少ないこれらの図と、関連する伊能図を一堂に展示します。特に、日本列島を三枚の図に収める当館所蔵の「小図」は、江戸幕府の昌平坂学問所旧蔵品で、昨年三枚揃った図としては国内で初めて確認され、話題を集めたものである。本展で初めて一般に公開されます。また、鎌倉時代から江戸時代に至る日本図や世界図を多数出品し、日本人や外国人がとらえた日本の「私たち」のうつりかわりを紹介します。さらに、国土交通省国土地理院の協力を得て、二〇〇一年に米国議会図書館で発見された大縮尺図「大図」の復元図を、平成館の床面に展開、その大きさと精度を実感していただきます。

この展覧会を通じて、伊能図の持つスケール感・精細さ・美しさと、国土の姿をとらえようとした先人たちの足跡を実感してください。

（東博案内より）

伊能大図展の動き

アメリカ伊能大図展実行委員会で検討されてまいりましたが、大図公開について予定が判明してまいりました。ここで主な予定をお知らせします。

なお、日にはいずれも来年、平成16年です。

□博物館展

・神戸市立博物館	4・16	5・23
・仙台市博物館	6・4	7・19
・MOA美術館	7・30	9・5
・徳川美術館	10・1	11・14

(予定) 静岡県熱海市
名古屋市

□フロア展(確定分)

・仙台科学館	6・4	6・6	無料入口ホール
・松山総合コミュニケーションセンター	6・21	8・25	無料スペース
・名古屋市科学館	10・29	10・31	*有料、会期延長検討
*その他	札幌、帯広、新潟、神戸で検討中		

広島、福岡は努力中

□観測機材展示

フロア展示ではわんか羅針、中象限儀、小象限儀、量程車、半円方位盤、鉄鎖、間縄の七点が展示される。

□アメリカ大図の進捗状況

大図二〇七枚のデータはほぼ入手しており、そこから展示用地図を印刷している。着色作業は九月末で、無着色一六九面のうち、約一〇〇面が完了している。この秋の東博ロビーではこのうち約六〇面が展示される。この着色作業は伊能洋グループが担当し、夏休み返上で進められた。

なお、前号でご案内した傷んだフランスのペイレ中図は京都の日本写真印刷のご厚志により修復される予定がきまった。



写真は地図センターで色合せ作業の様様



伊能大図の複製元作業をむかへる
画家たち11日、東京都目黒区で



20年前の伊能大図
よみがえる色

伊能忠敬が作った「天
日本海輿地全図」の
ち米國で発見された伊
能大図（縮尺約3分の
千分の1）の写本の複製
に彩する作業が進み、
その色合わせが11日、東
京都目黒区の日本地図セ
ンターで行われた。副総
長島から静岡近くまで、
長大ほどの地図が十数
枚並べられ、微妙な彩
の差を調整していった。
写本はワシントンの議
会図書館で2年前に見つ
かっただけで、国土
地理院が電子データの誤
り受けを進めている。
約170枚は彩色され

朝日新聞 2003年8月12日 第二社会面
伊能忠敬の大図 よみがえる色

「伊能大図」子孫が復元 毎日新聞記事
江戸の測量家、伊能忠敬の七代目にあたる洋画家、伊能洋さんらが、東京都世田谷区のアトリエで二〇〇年前の伊能大図写本のコピーに彩色し「平成の伊能大図（たいず）」を制作中だ。大図は17年かけて日本全土を測量した忠敬の汗の結晶ともいえる三万六千分の一の基本地図。縦1び、横2びで全214枚。つないで広げれば、縦48び、横47びの巨大地図だった。
原本は1873年の江戸城大火で焼失した。しかし、二年前に米議会図書館に207枚分の写本が保存されていることが分かり、国土地理院がデジタル映像として提供を受けた。復元される大図のうち関東圏と関西圏の計60枚が、10月31日から12月14日まで、東京・上野の東京国立博物館で開催される「伊能忠敬と日本図」展で初公開される。
【佐藤由紀】記者

NEWSLINE (11)
「伊能大図」を復元 30



伊能忠敬の7代目にあたる洋画家、伊能洋さん（60）らが、200年前の伊能大図の復元に取り組んでいる。原本は江戸城の大火で焼失したが、米議会図書館に写本が保存されていた。

毎日新聞 2003年9月4日 1面カラー
「伊能大図」を子孫が復元

特報

二〇〇三年九月一七、一八日

伊能忠敬研究会「大阪旅行」にて

(編集部・福田)

続く親交三世紀 伊能・間家の交流

六十年ぶりの再会、大阪旅行で

町人天文学者の業績を称える

会報32号伊能陽子さんの「芳名録」には、羽間平三郎ご夫妻の写真と書が紹介されている。その文章には気になっていたことが解消したうれしさが、限られた行間に躍動していた。書を再録しよう。

十一屋

五郎兵衛も

ここに

梅の花

羽間 生

間家七代目の重富は、はじめの姓は羽間であったが寛政の改暦の

統国寺墓前でご対面

今年9月17日大阪は残暑。33

度を記録する。現当主の羽間平安氏ご夫妻と伊能洋氏ご夫妻が重富墓前でご対面する。重富は約200年前、忠敬の師高橋至時とともに麻田剛立に天文学を学ぶ。至時と寛政の改暦で江戸へ出る。寛政七年(一七九五)のことで、翌年に忠敬は至時の門弟になっている。忠敬と重富は十一歳忠敬が年上だが、高橋邸などで親交があったことは想像にかたくないだろう。家を通じての交際については確かな書面などが今後見つかるような気がする。近年、間家墓地は邦福寺の事情によりここ統国寺の管理になっている。

羽間文庫の収集

平三郎氏は間重富の顕彰に力を尽くし、天文関係資料を中心とする豊富で質の高い「羽間文庫」を設立され、文庫の充実に生涯をささげる。長女の浜本正文さんの著書によれば「重富は質屋で資産があったと諸人は言うけれども、

隣家よりの類焼で質蔵は一庫を残すのみとなり、家の再建と商売の再建奔走のなかでの学問であった。このことを知って欲しい。と平三郎は常に言った」と。

平安氏の決断と貴重な展示品

今日、お目にかかった平安氏は大坂の偉人、町人天文学者間重富の史料を集積した羽間文庫を大阪市に寄贈され、市立博物館ではこれを記念して平成11年10月に一般公開された。



今回の旅行で貴重な史料をすぐ目前で拝見できた。「日食、月食観測記録」「山陽道実測図」「和蘭天球儀」に、あの「フランスデ曆書」「曆象考成後編」など貴重書。当時の「反射式望遠鏡」「屈折式望遠鏡」「竹製・渾天儀」「天球儀」な

ど盛り沢山だった。

後世への貴重な遺産

羽間文庫の充実に一生を捧げられた平三郎氏の長男・平安氏夫妻や正女さんに丁寧な歓迎をいただく。資産の乏しい中を血の滲む思いで文庫充実に力を注ぐ先祖とそれをみつめたみなさんの思いにいたる言葉が見つからない。

伊能・羽間両家の再会



平三郎氏の芳名録が平安氏へ・統国寺にて



浜本正女さん、相蘇副館長と・大阪市立博物館にて

忠敬「測量日記」から

佐久間さんの「測量日記」によれば、忠敬さんの大坂は文化二年（一八〇五）年に始まる。第五次紀伊半島中国沿岸測量の途中、付近の測量や間宅での観測を行って京都に向う。

□八月十八日（新暦九月十日）朝曇天小雨。六ツ後堺町出立。：住吉宮参詣：大坂長町の入口迄測。（今宮村にて中食）それより大坂斎藤町旅宿へ八ツ頃に着。直ちに間清市郎へ書状遣す。無程、間清市郎来る。：それより間清市郎案内にて西御奉行所佐久間備後守へ我等、坂部兩人届に出る。

□同十九日晴天。：間清市郎来る。
□同二十日朝晴。：此日午後間氏招きに付見舞、一同馳走に成。
□同二十一日朝より晴天。：此日間氏を頼み暦局へ大坂書状を出す。
□二十四日曇晴。朝五ツ半頃宿出て麻田立達、安立左内、青木常左衛門へ見舞。それより浄春寺の麻田剛立の碑へ参詣。高津ノ宮生玉

社天王寺清水へ立寄八ツ後帰宿。

□同二十五日朝大曇天。：七ツ後より測量の為に我等、高橋、坂部、平山、同道にて間氏宅へ行。
□同二十七日朝曇午後より晴る。七ツ後間氏へ行。山々を測。

□同二十八日朝より晴天。暦局行書状、間氏へ頼て飛脚へ出す。□同晦日雨見合。五ツ頃大坂斎藤町出立。（間清市郎、足立左内、関権治郎、大岡藤二、止宿世話人庄治郎、野田町迄送別）：
二度目は文化五年（一八〇八）

二月（新暦三月二十日）第六次測量で往路に立寄る。帰路の十一月にも立寄っている。
間清市郎は重富の長男。後に重新（しげよし）。この頃、重富は前年に高橋至時の死去に伴い江戸へ出て景保の後見にあたっており、大坂は弱冠二四歳の清市郎にまかせていたようである。麻田家は剛立亡き後は養子立達の代になっている。ここには間清市郎さんが毎日登場している。たいへん信頼し、安心して世話になった次第が日記には正確に記録されている。



記念撮影一前列左から前田、伊藤、新沢、大友 二列目左から伊能洋、渡辺、香取、長岡 上段左から中尾、西川、石川、穂吉、藤岡、羽間夫人、羽間、斉藤、松田 右側へ前から成家、河島、中山、中川、本郷、横川、伊能夫人、渡辺夫人 後列へ荻原、原田、羽間子息、松尾、福田の参加各氏と羽間家・大阪統国寺間重富墓前にて

「伊能忠敬研究会がゆく〜大阪編〜」

新沢 義博

平成十五年九月十七日晴天。五ツ刻（午前八時半）武蔵国羽田空港
 出立。半刻後（一時間後）摂津国大阪空港着。

『測量日記』調に表せばこんな書き出しとなるか。羽田集合が十九名、途中新大阪駅で九名が合流し計二十八名の参加で、一泊二日の大阪旅行が始まった。研究会主催で宿泊つき旅行は、平成十一年に忠敬の成長のあとを追った九十九里〜佐原以来である。

今回の旅行は、忠敬の功績を顕彰するものではなく、江戸時代の天文・測量のルーツを探る旅行となった。スケジュールは研究会にふさわしい内容の濃い充実したものだった。

今回の一番の収穫は何と言つても「大阪の伊能忠敬」（と称したら不適切になるか）ともいうべき人物の間重富はぢらみを知り得たということである。ご子孫の方や重富を研究されている二人の研究者の方からお話しをお伺いすることができた。



最初に向かったのは重富の観測所跡である。この石碑がただごとではない。碑の形や碑文は普通なのだが、建っている場所が尋常でない。なんと道と道の間にある中央分離帯の中に悠然と建っているのである。

以前当地を訪ねられた会員の荻原さんは「石碑は交差点の角にあった」と言われる。道路の拡張工事等で石碑が移動させられるのはよく

あることなのであろう。破壊や撤去されるよりかはましだろう。かえって建物の間にあるよりは目立っていた。

次は重富のお墓がある統国寺へ。途中先日十八年振りのリーグ優勝を成し遂げた阪神タイガースの看板を取り付けている、大阪のシンボルの一つ通天閣を横に見て天王寺交差点の角を曲がった。この辺り古代は茶臼山古墳で近くには日本最古の寺とも言われ聖徳太子建立の四天王寺をはじめ数多くの寺が点在する。大阪冬・夏の陣では徳川家康・真田幸村が各々陣をおいた歴史ある土地である。その一角を現在はこちらともあろうか色街として夜を賑やかしている。隣におられた会員の中山尾さんが「あまりにも世俗的だ」と一笑に付されたが、これもまた歴史の流れで存在しているのではないかと半分納得した。



境内へ入りお墓へ行くとき若い方に迎えられる。その方は十四代目の現当主羽間平安さんのご子息。羽間さんは親子二代でご多忙のところお出迎え下さった。平安さんは現在関西大学の理事長職にあるが、中学時代は足が速く陸上選手だったこと、大学の時はアメフトでご活躍されたこと、スポーツ一辺倒で過ごしたため、天文等には無縁だったと気さくにお話しされた。お墓を中心にして羽間さんご家族にも加わって皆で記念撮影。

昼食は以前、伊能陽子さんと安藤さん（今回の参加を楽しみにしておられたが足の具合が悪いためやむなく欠席された）が同地を訪れた際、昼食はここがよろしいのではないかと絶賛された阪口楼へ。池が

見え趣のある部屋で普茶料理という聞き慣れない料理をいただく。ちなみに普茶料理とは黄檗料理のことで野菜を主とした中国式精進料理である。平安氏の姉にあたる浜本さんは翌日の大阪市立博物館にもお越しになりわざわざご案内をいただいた。

一日目最終予定は大阪市立科学館へ。当館は展示型というよりは参加・体験型の科学館である。子どもから大人までじっくり科学について学ぶことができる文化施設である。見学後、会議室へ。

先般刊行された渡辺代表編『伊能忠敬測量最隊』の一部を執筆された嘉数次人学芸員が間・伊能の天文暦学を中心にわかりやすく説明して下さいました。嘉数さんは専門が江戸時代の天文暦学。特に興味をもって聞いたのは、全国測量は当初、東日本は忠敬に、西日本は重富に担当させる計画だったが、事情で忠敬が全部測量したことである。後半には『ランデ暦書』の実物やその他史料を閲覧しながらご説明いただいた。余談ではあるが予想していたより嘉数さんが若い方であった。見た目では小生と歳があまりかわらないのではなからうか。ちなみに小生は現在三十一歳。

宿泊は有馬。有馬温泉は日本三大名湯の一つ。宿泊する兵衛向陽閣は忠敬も文化八年三月十一日第七次測量の帰路に一泊した。当時の兵衛治郎左衛門宅は現在のホテルの場所と異なっているが。

ホテル到着後、神戸にお住まいの原田さんのご案内で一時間ほど周辺を散策。驚嘆したのは炭酸泉源。字の如く蛇口をひねるとサイダーのような炭酸水が湧く。毎晩サイダー割りを楽しめそうだ。

宴会が始まるまで時間があるのでまず一回目の入湯。十九時より宴会開始。この席では前田さんと小生が進行役に。最初に酔っ払う前に皆で記念撮影。師である西川先生の音頭で乾杯。しばらく歓談から、一人一人の自己紹介へ。皆さん思い思いに話して下さい。中締めは久

美浜町の松田さん。その後の本締めといえ、この方、注連縄しめなわ研究の大友さんが一本締め。二十一時頃お開き。余韻を漂わせながら二次会へ。小生は酔いを覚ますため二回目の入湯。顔を出すだけだったのが結局、午前零時過ぎまで皆さんの忠敬への熱い想いと今後の研究会のあり方などについてのご意見を拝聴する。就寝前に三回目の入湯。その後ふとんの中で熟睡。一日目終了。

二日目一番手は最近開館したばかりの大阪市立博物館へ。見ごたえのある常設展示を見学して研修室へ。副館長の相蘇あいそさんのご説明を受ける。間がなぜ羽間に変わったのかその経緯などをお話しくださる。後半は平成十一年に昨日お会いした現当主の羽間平安さんから寄贈いただいた羽間文庫の特別史料が公開される。渾天儀・反射式望遠鏡や実際に重富・重新父子が測量した実測図等を見学する。

館を出た後、バスの中で一人ご紹介がある。兵庫県山崎町からおいでになった鈴木多恵子さん。鈴木さんは「伊能ウオーク」の第四ステージで北九州から鹿児島島の指宿まで歩かれた方。無論、小生も面識もあり三年振りの再会である。中山翠さんのお誘いで、本日最後までお付き合いくださった。

次はオフィス街の中にある適塾記念館へ。緒方洪庵旧宅を兼ねたこの蘭学塾からは後の明治時代に活躍した多くの人材を輩出した。その中の一人、佐賀藩出身の佐野常民は日本赤十字社の創始者であるが、ある講演で忠敬を賞賛している。

昼食は大阪一の繁華街、ミナミへ。麺好きの小生は和歌山ラーメンを食べる。法善寺横丁の水かけ不動、先日も阪神優勝の際、飛び込みがあつた道頓堀川の戒橋を見学する。

大阪旅行会の最後を飾るのは東大阪市にある司馬遼太郎記念館。司

馬氏と忠敬。一見無縁とも思われる両者だが類似点がある。まず、氏の力作『街道をゆく』(十七巻)島原・天草の諸道編で上田宜珍よしのぶという人物の下、忠敬を引用している。最大の類似点は両氏とも目的があつて日本中を旅したということである。忠敬は測量して地図を製作する。地球の大きさを算出する。司馬氏は日本中を旅した結果、歴史や地理の視点から日本人とは何かといった答えを導き出したことである。小生は司馬氏の隠れファンでもある。『竜馬がゆく』はもちろん『菜の花の沖』先述の『街道をゆく』の全巻を学生時代に読破した。

門を入ってしばらくすると庭から書斎を見渡される。司馬氏が亡くなられた時と同じ状態で保存されている。今にでも本を片手に調べ物をしている姿を拝見できるのではないかと錯覚してしまうほどの迫力である。記念館に設置された書籍には圧倒される。本一冊一冊が展示品であり、何かを物語ろうとささやきかけているようにも思えた。



奇怪だったことは伊能さんが教えて下さったのだが、天井の隅から坂木龍馬の顔が浮かび上がっているということである。よく見ると確かにそう見える。はるか彼方から竜馬と司馬氏が来館者を見守っているのではないか。次回、伊能忠敬記念館を訪れた際、天井を眺めてみたらいかがなものか。

近鉄八戸ノ里駅で大阪組と手を振り合いの別れを交わしつつ大阪空港へ。自由解散となり各々の家路へ。

最後に第三回を実施する際は、ぜひ忠敬の顕彰を含めた旅行を要望する。地元資料や忠敬との関連がある人物にも焦点を当て、忠敬関連の史跡を訪ねてみたい。願わくは宿泊は温泉地を希望。

(しんざわ よしひろ・元伊能ウオーク本部隊学芸員)
参考文献

山岡光治著 『訪ねてみたい地図測量史跡』 古今書院
大阪市立博物館 『羽間文庫―町人天文学者間重富と大阪―』

お餅が大好きはざまさん

前田 幸子

今まで大阪といえば通天閣、食い倒れ、たこ焼きと、およそ歴史文化の香りとはほど遠いイメージでしたが、それが大変な間違いであると今回の旅行で気がつきました。地図を一瞥しただけでも重要な史跡がいたるところにあり、「大阪は宝の山。一度じっくり訪れてみなければ」との思いを強くしました。思えば大阪は長い間「天下の台所」として栄えたところ。史跡が多いのは当然のことですね。

今回の旅行は間重富が中心でしたが、「垂揺球儀」と「木星観測」の話が非常に新鮮で、今までの疑問が一気に解消いたしました。

また間重富のご子孫の方(間平三郎氏長女浜本さん)とお話ができただけでも楽しい出会いでした。大阪市立博物館を巡りながら伺ったお話。「家にあつた遺品はすべて寄贈しました。書物も観測機器も餅焼き網も」「餅焼き網?」「そう。もう餅が好きで好きで。大好きやっただけですわ」。あのはざまさんが大の餅好きであつたとは。十一の蔵を持つ豪商にして当代随一の天文学者、しかも垂揺球儀をはじめ多くの観測機器を考案した大天才である。この「江戸の超人」と「餅焼き網」の組み合わせが何かユーモラスで、残されている間重富の画像の柔和な面差しも相俟って、ほのぼのとしたものを感じました。「ラランデ暦書」

の訳解をするときも、難しい暦学の算式を考えると、傍らの火鉢で焼いた餅を頬張りながらだったのでしようか。残念ながら餅焼き網を展示物の中に見つけることは出来ませんでした。偉大な功績がありながらもあくまでも陰の功労者に徹し、最後まで町人学者で終わつた間重富の人となりの中に、大阪という町の懐の深さを見るような思いがしました。

【関係記事 64頁】

明日へのエネルギーを吸収

成家 淑子

「大阪研修の旅」充実した二日間を送ることができました。研究会の会員の皆様方と親睦を深めながら「伊能忠敬と間重富の関係」を目で学び理解を深めることができました。忠敬が測量の帰路に宿泊した宿に泊まり、酒を飲み会員相互に楽しく「明日へのエネルギー」を「吸収」していくことができたことも感謝しています。来年の実施を楽しみながらがんばりましょう。皆様方のご健勝をお祈りいたします。

血が通いはじめた、間さんに

中川 幸子

旅行中は皆様のおかげで楽しく過ごさせていただきました。有馬温泉での一夜は楽しく、会員皆様方の親しみが増したことと思います。間重富さんの眠る墓所で御子孫の方々に御目にかかったことは、歴史の中の人物としか私には考えられなかつた間重富さんに急に血が通い出し、忠敬先生と共に時代に確かに実在し、活躍していた人物なのだと思えるようになりました。博物館で拝見させていただいた遺品の数々は、この研究会に入り、今回の旅行に参加していなければ目にする事が出来なかつた品々です。ありがたいと思います。

また、貴重な参考資料をいただきました。中には次の大阪旅行にはこれ一枚持参すれば?と思うものもあります。皆様方に感謝します。

高橋至時と妻の「柿の木挿話」と無量寺

荻原 哲夫

高橋至時と妻の「柿の木挿話」

幸田露伴の『伊能忠敬』（一八九九年）には、「柿の木挿話」とよばれる箇所がある。

これは忠敬の師である高橋至時が、家計の助けとなる柿の実を柿盗人から守るための見張りで、勉学の心を乱されているのを見かねて、妻・志勉しゆが大切な柿の木を切らせるといふ賢夫人ぶりを紹介した話である。『露伴全集』第五巻に収録されたものを「別紙1」に示した。

この話のオリジナルが、滝沢馬琴が主催した兔園会とえんで披露された珍談・奇談を集めた『兔園小説』に収録されているものであることはあまり知られていない。（そのためか、某有名歴史家がとんでもない説を著書に書いておられたが名著のためにここに名前を秘す。）原文は「別紙2」に示したが、少し手を入れたものを次に示す。

賢女

天文方高橋作左衛門（景保）、その父作左衛門（至時）、もとは浪花の同心なりしが天学に長ぜしかば兼ねて登用せられしなり。いまだ浪花に在りし時、庭に大なる柿の樹あり。秋ごとにその実を売りて若干のこがねを得しとぞ。然るにその辺の若者ども、夜に紛れて盗むこと数しらず。よりてその守りにあるじ、いもやすからで、夜もすがら見めぐりなどなす。ある時、番より帰りに見れば、さばかりの大木を根ぎはより伐りたふしてあり。こはいかなるこ

とぞとおどろきあはてければ、妻のいふよう、わらはがきらせぬるなりと、何故さはせしぞと咎めければ、さん候、ぬしは天学にて必、家をおこさせ給ふきざし見え侍り。されば夜ごとに屋根にのぼり、霄漢をうかがひ、深更に至り、そのうへにこの樹の為に精神をつひやし給ふはびんなき事なり。此樹あらずば本業專一にてよかるべしとおもひ侍るによりてかくははからひしといひけるとぞ、いにしへの何がし等が妻にもおとらぬ女とぞ思はる。これ今の作左衛門（景保）が母なり。さるに夫（至時）のここ（江戸）にめされし比は、よみの国にまかりし後なりき。かなしともかなしき事ならずや。

文政八年二月初八

輪 池（屋代弘賢）

（括弧付傍線は筆者）

輪池堂こと屋代弘賢は、幕府の奥祐筆であり、蔵書四万冊の不忍文庫の主人として有名で、馬琴はその蔵書に惹かれて近所に引越したという話があるとか。死後蔵書は阿波・蜂須賀家に引取られ、明治になつて切売りされたため、まとまったものは今は無い由。慶応大学に蔵書目録がある。

屋代の原文に露伴は脚色を加えて、うまく『伊能忠敬』に取込んでいるのはさすがとおもわれる。だが、この話はいったいどこから屋代弘賢が入手したのであるうか？ まったくの私見ではあるが、至時亡きあと跡を継いだ兄・景保を盛り立てようとした実弟の渋川景佑ではないか。または景保本人かもしれない。忠敬が伝えたということも考えられる。

高橋至時が大坂御定番同心として住んでいた場所は『麻田剛立』大



御定番同心・高橋至時の住居跡

分県先哲叢書」の256頁の地図「改正撰津大坂図(天保八年)」にあらわされた上本町二丁目少東(高橋至時の観測所・自宅)とおもわれる。現在の地図に対応付けたものを上記の図に示した。

高橋家の菩提寺・無量寺

高橋至時が天文方に登用されたとき、高橋家の系譜として幕府に提出した「先祖書」が「諸家系譜」にあり、そこに代々の命日が記載されている。

- 元 祖 高橋与市左衛門嘉量 享保六丑年 十一月廿八日死 五十八
- 二代目 高橋与市左衛門豊元 享保十三戌申年正月十四日死 四十
- 三代目 高橋音左衛門知明 寛政六甲寅年十一月十四日死 八十九
- 四代目 高橋四郎兵衛時秀 宝暦十二年 三月廿三日死 三十五
- 五代目 高橋徳次郎文輔 天明五乙巳年十二月廿一日死 四十六
- 文輔妻 明和七庚寅年 六月廿日死 二十四
- 六代目 高橋作左衛門至時

妻(志勉)寛政七乙卯年十月十一日死 (二一九)

右の七名の葬所は、大坂上本町八丁目寺町無量寺とされている。現在は大阪市天王寺区東高津町四丁目二四番地にある寿命山無量寺がその寺といわれている。お寺で聞いた話では過去帳があるのではないかとのことであった。墓石は整理されており、本堂裏にある集合墓の中に埋まっているかもしれない。

高橋至時は、寛政七年三月に間重富と共に暦学御用で江戸へ出府し

ていたので、妻・志勉が亡くなったときは、長男で一歳の作助(後の天文方・高橋景保)・次男で九歳の善助(後の天文方・渋川景佑)ら子供五人が残された。至時は御用繁多で大坂へ戻ることは出来ず、葬儀はおそらく至時の母の実家・青木家や間(羽間)家が世話をしたもおもわれる。

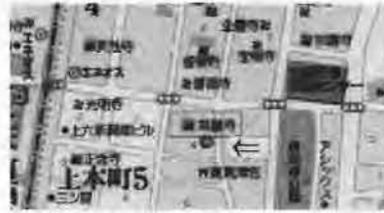
至時の次男の高橋善助(渋川景佑)は、伊能忠敬の第五次測量に参加した折の最後、文化三年(一八〇六)十月大津で測量隊を離れ、大坂の墓参をおこなった。私には「このとき高橋善助は、なぜ往きの測量行でも大坂滞在の折があり、すぐ近くの浄春寺にまで行っているはずであるにもかかわらず無量寺へ墓参に行かなかったのか？」という疑問があった。浄春寺は父・至時の師である麻田剛立の碑(墓)がある。このため、忠敬は大坂に着いたら必ず参詣に立ち寄ろうとしているに相違ない。事実、測量日記によれば、大坂での公務が一段落した折に、墓参を果たしている。そこに善助の叔父である青木常左衛門が同行しているので、測量日記には書いてないが善助も同行したのは確かであるとおもわれる。このときは測量の公務があるため、浄春寺の方を優先し、日程的に無量寺に行けなかったと考えられなくもない。しかし、私はそればかりではないとおもう。

高橋善助の伊能測量隊への参加は、父・至時が亡くなった直後であり、兄・景保が跡目を相続したので、次男の善助はいわゆる部屋住みの身分となった、その状況で、善助は兄・景保と重富・忠敬の三人の奨めにより、測量の実務を経験し、他家に婿養子として入るための修行のために参加したと考えて良いのではないか。

また、測量隊に参加し、関西・中国測量の長期の旅にあたっては、

おそらく、江戸で亡くなった父・至時の「遺髪」を懐にしていたのではないか、そして、測量が実質終わりになってから、大坂の墓参に向かうことは、あらかじめ兄・景保や忠敬らとの了解事項であったのではないか。

というより、これらはすべて忠敬の設定したことでないか、と考えるのは深読みが過ぎようか。



高橋家の菩提寺・無量寺

亡父の遺髪は、測量旅行中のお守りであるとともに、無事測量を終えるにあたって、大坂・無量寺に眠る母・志勉のもとに父の遺髪を埋めてあげることが最終目的であろうと、私は想像している。高橋景保御用日記によれば、大津から大坂への往復に一五日を予定していることから、これが単なる墓参では無かったことが推定されるとおもふ。

以上は私の推量であり、確かな裏付け資料がある訳ではない。

渋川景佑（高橋善助）は、ずっと後の天保十三年（一八四二）になつて、天保改暦のための土御門家・朝廷官僚らとの交渉のため上京したが、その折に高橋家先祖の探索のために大坂・無量寺に寄っている。このとき、兄・景保はすでにシーボルト事件で死去しており、天文方・高橋家が取潰しとなった文政十三年（一八三〇）よりずっと後のことである。景祐は、文化五年（一八〇八）に天文方・渋川家に養子として入っており、天文方・渋川助左衛門景佑としての立場で「高橋家の為の先祖調べをしているのだ」と実子・渋川六蔵に手紙に書いている。

ついでに書くと、その渋川六蔵は後に天保の改革で老中・水野忠邦のブレーンとして幕政にも関与するほどの才能の持ち主であるが、おなじ水野の三羽鳥とよばれる鳥居耀蔵らと共に失脚し、六蔵は九州の臼杵藩（稻葉家）に御預けとなり、そのまま帰らぬ人となった。

景祐は兄と息子をふたつの事件で失う悲劇を経験した訳である。私は六蔵が蘭学者を弾圧する側にまわったのは、おそらく伯父・景保のシーボルト事件への関与に対する反動として、小さい頃から父・景祐のしつけが厳しかった影響ではないかと考えている。

参考文献

- [1] 上原久 『高橋景保の研究』講談社 (1977)
- [2] 千葉県 『伊能忠敬測量日記一』 (1988)
- [3] 宮嶋一彦 「近鉄文化セミナー」 (1998) 配布資料
- [4] 佐久間達夫 『伊能忠敬・測量日記』 (1998)
- [5] 中村士・伊藤節子 「天文方、渋川景佑の天保改暦京都書簡」 洋学5 (1998)
- [6] 宮島一彦・鹿毛敏夫 『麻田剛立』(大分県先哲叢書) (2000)

(注) これは、さる9月17、18日に行なわれた大阪研修旅行に

おいて配布した資料に手入れたものです。

(おぎわら てつお・㈱パスコ主任技師)

追記 筆者は、中学・高校の頃からの天文ファン・忠敬ファンであり、芝・増上寺裏の丸山にある測地遺功表や佐原の記念館など各地の史跡を訪ねたりした。仕事で出かけた富山県新湊市では、偶然、忠敬と石黒信由が出会った場所（放生津）に遭遇して因縁めいたものを感じたりもした。最近では「伊能忠敬と麻田流天文家」をテーマとし

『旌門金鏡類録』 (一)

小島 一仁

『旌門金鏡類録』(せいもんきんきょうるいらく)は、佐原の伊能三郎右衛門家が村政につくした功績と名譽について、忠敬・景敬父子を中心として記したものである。全四冊、墨付紙三八〇枚以上の記録であるが、そのうち、第一冊を除いてあとの三冊は、専ら忠敬と景敬の業績を記すことにあてられている。



まず、第一冊の内容から見ていくことにしよう。

第一冊は、大体、四つの「書留」を柱として書きすすめられている。その最初の柱は、左の通りである。

慶長十三年伊能勘解由景常（以下）御菜鮭御用相動候ニ付
青山幡摩守様ノ為御褒美村内塩役并網代場被下置候

書留

この「書留」は、天正一八年(一五八〇)の徳川家康関東入国から書きはじめ、慶長一〇年(一六〇五)から数年間、佐原伊能家二代目の景常が、大御所徳川家康と二代將軍秀忠の「御菜鮭御用」をつとめたことを記し、慶長一三年(一六〇八)、その褒美として、幕府から佐原村の塩役と網代場の権利を認められたことを、伊能家の名譽として書き留めているのである。その記述内容は『家牒』のそれとほぼ同じであり、將軍秀忠側近の青山幡摩守が景常に与えた鮭受取の手紙の写し八通が載せられていることも『家牒』と同様である。

また『旌門金鏡類録』は、はじめからおわりまで、同一人の筆によって記されたものと見られるのであるが、その筆跡は、『家牒』の筆跡と同じである。

次にかかげる二つの記述を見くらべていただく。 (一)は『金鏡類録』(二)は『家牒』の記述である。

慶長五年 鳥居彦右衛門様於山城国伏見城御忠死ニ付
御子息左京亮様同七寅年より御加増にて奥州岩城城江御所
替被仰付其跡吉田佐太郎殿御代官所ニ相成候

慶長五年 鳥居彦右衛門様於山城国伏見城御忠死ニ付
御子息左京亮様同七寅年より御加増にて奥州岩城城江御所
替被仰付其跡吉田佐太郎殿御代官所ニ相成候

慶長五子年八月朔日鳥居彦右衛門様於山城国伏見城御忠死
 同七寅年より御子息左京亮様御加増御高拾万石にて奥州
 岩城城江御所替被仰付其跡吉田佐太郎殿御代官所相成候

慶長五子年八月朔日鳥居彦右衛門様於山城国伏見城御忠死
 同七寅年より御子息左京亮様御加増御高拾万石にて奥州
 岩城城江御所替被仰付其跡吉田佐太郎殿御代官所相成候

(一)と(二)では文章に多少のちがいはあるが、筆跡が同じであることは一目見ただけでわかるであろう。しかし、この筆跡を残した人は、編集者とは別人である。後にくわしく記すつもりであるが、『金鏡類録』の編集者は伊能景敬であると考えられる。だが、その筆跡は、景敬のものではなく、また、忠敬のものでもない。今のところ、実際に筆をとって『金鏡類録』や『家牒』を記したのが誰であるのかは、不明である。

さて、第二の柱にうつる。

宝永二年閏四月二日伊能三郎右衛門伊能三郎右衛門於
 御勘定奉行萩原近江守様御宅 御褒被下置候 書留

「伊能景利が、勘定奉行萩原近江守の邸で、お褒めをいただいた」というのであるが、その理由は何であったのか。

宝永元年（一七〇四）六月、関東の諸川、利根川、鬼怒川、小貝川、

荒川、渡良瀬川、江戸川等が大洪水をおこし、各地の堤防を決壊させた。そのため、翌二年、幕府は大規模な川除普請を計画した。幕府の普請計画は、一番帳から十番帳まで一〇の地域にわたってたてられていたが、このとき、景利は一番帳の工事——根郷五ヶ村（岩ヶ崎、佐原、篠原、津宮、大倉）のほか近隣七ヶ村を合せた一二ヶ村にわたる——を、金五七五両余（永五百七十五貫百十文）で落札し、工事を成功させると同時に、凶作に苦しむ農民たちをこの工事にやとって、生活を凌がせたのである。

この川除普請落札について、『家牒』は、わずか数行の記述でかたづけている。しかし、この普請を成功させたことは、公的な意味では景利の最大の業績であったので、その経緯については、景利自身が、『部冊帳』第十一巻の全部、墨付紙九八枚を費してくわしく記しており、また、『金鏡類録』もそれを土台として、墨付紙五三枚でかなりくわしく記している。だが、その内容を要約してここに記すことは、とてもできるものではない。もし、このことについて、具体的に知りたい方があれば、『佐原市史』（資料篇別篇一・部冊帳前巻）の中の「第十一巻」を御覧いただきたいと思う。

第三の柱は次の通りである。

宝暦八年寅二月二日永澤浩平右衛門征俊伊能三郎右衛門於御奉行所
 為御褒美白銀頂戴其身一代孝刀苗字は子孫迄御免被仰渡 書留

これは、宝暦七年（一七五八）六月、佐原村「小百姓名代」の願人平右衛門が、永澤治郎右衛門征俊の善行について幕府評定所に箱訴を行つたため、種々取り調べの結果、翌年二月、大橋近江守奉行所に於

下総国香取郡川通村々内別御支配所之儀、当夏中々雨降続田畑者勿論百姓家居迄水湛下地困窮之上、尚又当年水難故夫食貯等も無之者難儀の様子見請候付私共村方永沢治郎右門仁兵衛兩人平日仁心有之もの而此度之儀相救申度心懸候得共数多之事故行届兼候、然共存付候儀付少々たりとも水難の足米も相成候得者本望之至奉存候旨申之私共及相談当時金百両差出可申旨申之候、依之右金高之内金五拾両者居村小前之もの合力仕、残り五拾両之分者御支配所村々合力支度奉存候得共、他村之事故水難之軽重も難計御座候、乍恐右金御役所おみて御配分御渡被下候様奉願上候、右之段御聞届之上右願之通被成下候ハ者私共一同難有仕合奉存候、依之書付を以願奉申上候、已上

明和三年戊十月

下総国香取郡佐原村

名主 茂左衛門

同 七右衛門

以下略

永沢征俊の子俊順とその叔父軌景の二人は、水難に苦しむ百姓たちに合力したということで、代官所で「御褒美」を頂戴したというのである。

『旌門金鏡類録』第一冊の主要な内容は右の通りであるが、最後につけ加えのような記事がある。その一つは、明和九年（一七七二）、伊能三郎右衛門（忠敬）と伊能茂左衛門の兩名が、勘定奉行石谷備後守から、佐原村の川岸問屋として正式に認められたということである。

これについては、忠敬自身が『佐原色河岸一件』という記録をのこしており、本誌23〜25号で私が解説させていただいているので、御覧いただければ幸いである。そのほかに、安永七年二月に、稲垣藤左衛門代官所から達せられた強訴・徒党・逃散を禁止する「御觸」の写しを

のせており、さらに、安永八年十一月、永沢治郎右衛門（俊順）が川船役所に書類を差出す際に、父と同様に苗字を記したいと願って許されたことが記されている。

交遊抄

田中久義氏

8月6日

日本経済新聞

—— ウオーキング ——

最近、老いも若きもウオーキングに対する関心が高いようだ。私にとってウオーキングの指南役といえるのが、日本ウオーキング協会（JWA）専務理事の木谷道宣さん。私が東京支社に赴任したばかりの一九九一年に知り合った。

木谷さんは当社のウオーキングシューズの開発にアドバイスをくださるなど、会社としては以前からお付き合いがあった。仕事の打ち合わせでうかがった私に、木谷さんは「実際に一緒に歩いてみませんか。結構、楽しいものですよ」と気軽に声をかけてくださった。これをきっかけに、私はウオーキングの魅力に引き込まれていった。

「歩きながら様々な分野の人たちと会話するのがこの上なく面白い。四季折々の自然も魅力でしょ」と木谷さんは豪快に笑う。全国を精力的に駆け巡り、さながらウオーキングの伝道師といった趣を漂わせる。私も木谷さんの手ほどきで各地でウオーキングを楽しみ、第二の青春を味わえたと思う。

このごろはお互いに仕事に追われ、ウオーキングの機会が減った。いきおい、運動不足が共通の悩みになってきた。先日、近況報告をしながら酒を酌み交わしたが、今度こそ一緒にウオーキングに繰り出したいと考えている。

（たなか・ひさよし 月星化成社長）

忠敬と漢文の一紙

伊藤 栄子

忠敬の漢文の師は久保木清淵、下総国香取郡津宮村の人、号は竹窓、字は播竜、後仲黙と改めた。江戸日記にも度々登場する。忠敬の方が大分年上であつたが漢学の教えを受けた。人となり重厚、徳行を以つて評判高く、経学、書道に通じ、遠近より学ぶ者が多数集つたといわれる。また水戸の郷校にも招かれて書を講じた。忠敬とは前々から親交があり、寛政五年には関西方面へ一緒に旅行したこともある。その後全国測量の地図製作では、図上に細字記入をして協力を惜しまなかつた。文政十二年八月没、年六十八。著書に補訂鄭註孝經一卷、その他がある。

また最近になって消息がわかつた忠敬の四番めの妻妾も、久保木清淵の門人であつたという。当時の女性としては珍しく、白文もすらすらと読み、数学も理解し、地図の線なども引いて忠敬の助手をつとめ、師の高橋至時をして「勘解由は幸せ者」と言わせた程の才女であつた。これらの事実も久保木先生の門下生であつたことで納得がいく。

この文書は、世田谷伊能家に残された断簡の中にあつたもので、漢文は忠敬の自筆である。数ある断簡の中に数学、暦算等の文中に短い一、二行の漢文は出てきたが、一枚にわたるものは珍しい。忠敬がこのような文を記していたのは、若い頃の佐原時代ではないかと思われる。筆跡を見ると几帳面な忠敬の字も、晩年のものはそれなりに字が枯れている。

*白文(漢文で句読点や返り点、送りがな等を付けない原文)

在印

撒蜜佗列耶阿兔(疑兎誤)要披促革尼麼子那

次吉 雪中庵蓼太

蓼太先生者隱君子也都人士以為金馬

門侍從之流惡矣乙未春於崎陽□館得

俳借歌一章言是先生所著僕不能誦某

国字故就訊士某得解解則興在景中意

在言外大非俗品可知蓋僕亦有所惑也

因賦一絶写其意傲掣請所不辭也

長夏草堂寂連宵聽雨眠何時懸月色

松影落庭前

乾隆四十年孟夏望後二日雲間程劔南

在印のあとの一行は、誤りが二カ所ある。これは最後の行にルビのついた一行と同文で、俳句である。雪中庵蓼太先生の作。

さみだれや、あるよひそかに、まつにつき、と読める。

サミタアリエヤア ヨ、ルウヤウ ヒイツカニイ マアツウノヲツウキ

撒蜜他列耶 阿兒要 披促革尼 麼子那次吉

予按譯士以華音代国字音也

読みくだし文

蓼太先生は陰君子なり。都人士以為(おもえらく)「金馬門

侍從の流悪ならん」とて、乙未の春、崎陽に於いて俳諧歌一

章を得たり。是れに言う先生の著わす所なり、と。僕某国の

字を読む能わず。故に訳士某に就きて解を得たり。解すれば

在印

撤密他列那阿免疑兒要披促草尼磨子那

次古 雲中蒼蒼大

夢太先生者隱君子也都人士以爲金馬

門侍從之流惡疾

能偕歌一章言是先王所著僕不能讀

國字故就譯士某得解譯則在亭中意

在言外大非俗品可知蓋樓亦有所爲

因賦一絕寫其意傲謂所不稱也

長夏草堂寂連宵睡前眠何時應月多

松影落庭前

乾隆四十年孟夏望後二日雲間程劍南

撤密他列那阿兒要披促草尼磨子那次吉

予按譯士以華言代國言也

則ち興は景中に在り、意は言外に在り。大いに俗品の知る可
きに非らず。蓋し僕も亦感ずる所あり。因りて一絶を賦して
其の意を写す。顰（ひそみ）に倣うの誦（そしり）は辞せざ

る所なり。

「長夏の草堂寂たり、連宵雨を聴いて眠る、何れの時か月色懸る、

松影庭前に落つと。」

乾隆四十年、孟夏望後二日雲間、程劍南、

（乾隆四十年は、わが国の安永四年、孟夏は陰曆四月、望後二日は

十七日のこと。）

大島蓼太が、ある時清の人程劍南に通詞（通訳）を介して、俳句を
示した。「五月雨や、ある夜密かに、松の月」そこで劍南はこれを鑑賞
し、詩を作つてこれに和した。それが前掲の「長夏の草堂」の五言絶
句である。崎陽は長崎。一絶は絶句のこと。金馬門は中国の故事から、
文学の士を集めたところ。

程劍南は蓼太先生の噂を聞いていたのであろうか。この句の興趣は
景の中にあり、情調は言外にあり、俗人には知り難い趣があつて、私
も感動して絶句を作つてみた。人まねをしたと非難されてもかまわな
いと書かれている。

ところで五月雨やの句と、漢字にルビのふつてある一行を、対比し
て読むと日本語の発音になつてゐるから面白い。華音に代わる国字音
とあり一見すると、お経のような文字が並んでゐる。これを忠敬さん
が一所懸命に書き写した情景を思い浮かべると、まことに微笑ましい。
まだ天文曆学に没頭する以前のゆとりが伝わつてくる。

大島蓼太については、何年か前に村山先生の漢文の講義で、この一
句と蓼太についての挿話を伺つたことがあつた。たまたま忠敬の文書
の中に、同じ句と蓼太先生の文があつたのでまとめてみた。

蓼太先生についての挿話とは、明和九年（一七七二）江戸に火事が
あつた。記録によれば、目黒行人坂の大円寺より出火、麻布、芝、日

比谷、霞ヶ関、京橋、日本橋、神田、下谷、浅草から千住迄を焼いた大火であった。当時塩町しおちょうとのみ記された先生の住居は、日本橋の大伝馬塩町にあつたと思われる。火勢激しくまさに火の手が真近に迫つた時、先生は稿本を机にのせ、水入りの瓶びんをもつて、火を深川の要津寺よしんじに避けた。そこで「心血をそそいだ稿本が無事で何よりであつた」と、平然として句作に励んだという。

忠敬も佐原に居た時から、俳句に親しんでいたようで、佐原近辺でも句会は盛んに行われていた。その上時から伊能家では江戸店もあり、俳人蓼太に関する情報も、いち早く伝わつたものであろう。

大島蓼太（一七一八一—一七八七）は江戸中期の俳人で、雪中庵を継ぎ三世となつた。通称平助、宜来、豊来、里席、老鳥、などの号を持つ。東西南北に吟行すること五十余度、東海道を十九度も往来して各地を旅し、門人は三千人といわれた。仙台、駿河、遠江等各地に庵を置き、諸公の指南に廻つた。派手な振舞もあつたといわれ、のち蕪村が出てから人気は落ちたが、芭蕉庵の再興にも尽力した。また深川の本宅近くの要津寺よしんじに佛塚おほかげがを築いて芭蕉の供養をした。著書は、芭蕉句解、筑波紀行、発句小鏡など多数。天明七年七十才で没。

要津寺は臨濟宗妙心寺派、この寺の辺は昔深川といわれていたが今の墨田区にある。江戸時代にも火災にあい、その後関東大震災、昭和二十年の戦災で寺は度々焼失したが再建され、現在境内には大島蓼太の建てた「古池や蛙とび込む水の音」の句碑と、佛塚が残つている。

（伊能家文書A1232）

出典及び参考文献

*「尚友小史」第二輯 中村鼎五（確堂）著 明治二十五年版

*日本人名大事典 平凡社

*大日本人名辞書

講談社

*江戸の火事

黒木喬著

同成社

*漢文は、湯島聖堂斯文会常務理事

早大名譽教授村山吉廣先生に

御教示頂きました。



現在の要津寺ちとせ（墨田区千歳2-1-16）

書評から 産経新聞 7月19日

児童文学作家 小暮正夫氏評

「岡崎ひでたか作 高田勲画『天と地を測つた男・伊能忠敬』くもん出版 江戸後期に全国を測量して歩き、精緻な日本地図を作製した伊能忠敬は今や「ウォークラリー」のシンボルの存在だが、その人となりや、地図づくりの目的や方法までは、あまり知られていない。ところが本書は児童書ながら、従来の伝記読み物の偉人伝的価値観を優先させることなく、綿密な資料しらべに裏づけられた忠敬の人間像を、ありありと描きだしている。——中略——自分の壁、測量隊内のもめごと等に苦悩する人間忠敬に作者は深く心を寄せ、気負いのない端正な文章で、大人読者からも共感される作品に仕上げている。

芳名録

より 一 佐原伊能家を訪れた人々

芳名録解説につきましてさっそくお便りを頂戴し、鶴峰氏、吉田祥朔氏の書と判明しました。福山市の菅波寛さんにご教示いただきまして。厚くお礼申し上げます。

今回はF・G・Hの三筆についてよろしくお願いいたします。

芳名録 D

(伊能陽子)

天忠 君に忠に

信行 信実ある行い

篤敬 手厚く敬う

大正庚申(九年)夏日 為ニ伊能君一

大正庚申(九年)夏日 為ニ伊能君一

鶴峰汚書印

芳名録 E

吉田祥朔・七言絶句

遠山近水路西東

風景依然人不同

唯有送篇傳古節

千秋事業仰高風

山遠く水近く 路は西東に

風景は依然たるも

人は同じからず

唯有るは篇を送り古節を傳ふ

千秋の事業に高風を仰ぐ

☆ 韻字：東・同・風(平聲上・一(東)

その場の情景を見たままならえ作る

風景當作光景

辛巳申夏訪伊能忠敬先生故宅

轉親在遺書奉賦

長州後学 吉田祥朔

辛巳夏の半ば、伊能忠敬先生宅を訪れ

展観す遺書(のこされた書)在り、詩を作りて終わる

長州後学 吉田祥朔

【語注】

遠山近水…美しい風景。

依然…元のまま。

篇…まとまりのある書き物。

古節…古人の立派な節操。

千秋…長い年月。

高風…気高い風格。

【大意】

美しい風景、路は西東に連なっている。

その風景は元のままなるも、人は変わっている。

唯現存するはまとまりのある書き物を送り届けた

立派な節操だ。

長い年月の測量事業に精励された気高い風格を敬慕する。

(菅波 寛)

お便り 東京都大田区 植田浩一さん

伊能陽子さん編の「芳名録より」——諸先輩の筆致やことばを毎号楽しく読んでいます。前33号17頁の記事に

第二艦隊参謀長 大佐 藤井校一 とあるのは、藤井校一（こういち）の間違ひと思ひます。藤井大佐は伊地知大佐と海兵七期の同期、のちに横鎮長官、大将となり、大正一五年七月に亡くなった。近刊の『日本海軍鑑揚ゲ』（阿川弘之・半藤一利著）には、日本海海戦における藤井大佐の功績が披露されています。

また、日高壮之丞は山本権兵衛と同じ海兵二期で、東郷平八郎と入れかわって舞鎮長官になった大将で昭和七年七月に亡くなっています。



芳名録解読のお願い・パート3

芳名録 F

大正九年九月十一日予來佐原為修養會講談
 伊能三郎右衛門君亦同會幹事之一人也君實
 為我邦測量術之泰斗忠敬先生之子孫十二日
 朝訪君家詳觀先生遺物及日誌言翰並
 大小地圖偉人慈之痕歷之可徵也予聞此
 數日帝國測量製圖之術今日卓然於世
 內者蓋負于忠敬先生也多美予要時
 后南船北馬不暇序曠自思亦以盡微衷
 矣今石反訪伊能君接福先生之遺風然
 然自失正覺努力之不逮及嗚呼先生先
 生之賜也謹書所感以謝偉人之風化焉
 國立新聞社理事 中嶋 義孝

注・文中の「伊能三郎右衛門」は忠敬から五代目景徳。洋の祖父。

・国民新聞社は徳富蘇峯が創刊。九十九里公園（伊能忠敬先生出生之地）は蘇峯の揮毫。

芳名録 G



芳名録 H



伊能忠敬と鳥取・智頭街道 (因幡街道)

ちづかいどう いなばかいどう

田中 精夫

伊能忠敬と鳥取池田藩の記録

文化三年(一八〇六)八月八日(新曆九月十八日)、伊能隊三番隊の高橋、平山、小坂らは、米子市陰田町の国境から米子城山際の祇園社まで測量を始めた。その時、事件が起きた。米子の役人が言った。

「ここから先は城郭の堀通りなので、藩主の許可を得た上でなければ測量してはならない。米子町の宿舎に引き取ってもらえないか。」やむを得ず一行は、鳥取藩の案内にしたがい後藤周介宅に止宿した。そこへ、鳥取藩の郷方役人、塩倉文助、吉田織右衛門がやってきた。「領内の概略地図、石高、人家、名所、仏閣等の書面を提出することについて、鳥取表へ伺いをたてたが、提出することはできないとのことである。」「郡村名、家数、神社仏閣の覚え書きは提出しても良いが、概略地図はお断りする。」と言う。坂部と平山は、米子寺社奉行下役の青砥 團右衛門に城際海岸測量のことを交渉した。役人は言う。「この城は鳥取藩家老荒尾近江の預かり地である。よって、測量を認めることとはできない。」坂部は、これまで諸国、海辺城々で滞り無く測量できたことを話した。伊能忠敬本人が直々、團右衛門と直接交渉し、ようやく了解を得た。上役との交渉に大いに時間をとられた。

伊能隊第五次調査では、米子に入るなり荒尾家役人の妨害を受けるという不幸なできごとが発生したが、予定どおり海岸部の測量を続け、八月十六日(九月二六日)には、鳥取城下へ入った。鳥取藩の記録『因府年表』に伊能隊の記事がある。

「十六日 幕府海辺巡歴天文測量方の御役人伯州の方より来たり、鑄物師町に一夜止宿。その従者三百人余り、酷権勢を振り狼藉の挙動ありと云う。東の灘辺に沿ふて但馬国の方へ逾ゆ、里程の遠近海水の浅深を計れる様に推察せられ候由」鳥取藩が伊能隊に警戒心を持ち、一行を歓迎しなかつた様子がよく伺える。

七年後の文化十年(一八一四)閏十一月二十三日(一月十五日)、再度伊能隊は鳥取を測量した。この時の鳥取藩の記録には、『幕府天文方の御役人飯尾勘解由と云人、余多の属吏を引率して九州・出雲の方より来り、鑄物師町に止宿せり。此度、天文海内の地理測量せしめられんが為也と云々。四五日逗留して於いて所処測之。此勘解由は篤実温和の人物にして、其道に志ありて伝授を請ん事を望者あらば、聊も秘する事無くして伝之。然間其門人漸々に滋殖して、従来りし者少々ならずと聞えあり。御国事済、播州・作州の方へ逾え候よし。』

文化十年の来鳥時の、鳥取藩の対応の違いがよくわかる。忠敬の表記が測量方の御役人から実名に変わった。行く先々で伊能忠敬の評判が高まっていた。池田家役人も忠敬を篤実穏和な人物と評し、最大の賛辞を贈っている。今回の調査で、いかに慕われ、尊敬されていたかがよくわかる。鳥取藩は伊能隊を歓迎し送り出した。

伊能忠敬と智頭街道

伊能隊の智頭街道(因幡街道)での測量は、第八次調査が初めてであった。そもそも今回の測量の目的は、中国地方の縦断であった。出雲街道、備中往来、智頭街道、備前街道と山陰道と山陽道とを結び縦軸の街道の測量を進めた。この街道の中で鳥取池田家の参勤交代の道である智頭街道(因幡街道)を、伊能隊がどのように測量していったのか。どのような人物と接触があったのか。当時の宿場町の痕跡はあ

るのだろうか。

智頭街道とは

鳥取城下から千代川沿いに南下して智頭町を經由して、岡山県大原町、兵庫県佐用町に至る道を「智頭街道」又は「上方往来」「京街道」と呼んだ。「因幡街道」とは、京方面から鳥取に向かう道の呼び方である。大原、佐用辺りでは「因幡街道」と呼んでいる。

鳥取藩の参勤交代では、第一泊目は智頭に宿泊する。鳥取から約三〇*の道程である。翌日街道一の難所志戸坂峠を越え、播磨の平福に泊まり、その後、姫路から山陽道に入り江戸へ進む。平福の代わりに大原に宿泊することもあった。

街道随一の宿場町、智頭には宿場町の賑わいの様子を今に伝える町並みや道が残り、大原、平福の宿場町にも連子窓、格子戸の平入りの家々や川屋敷、土蔵が当時の面影を伝えている。



街道の途中途中に休憩場所、馬の乗り換え地、あるいは旅人の宿泊地として、宿場町が整備されていた。以下、文化十年の調査で伊能隊の通った宿場町をたどり、約二百年前の宿場町を復元してみたい。

智頭街道の測量と宿場町

一、鳥取城下(本鑄物師町)

文化十年の第八次調査で鳥取城下に入った伊能隊は、鑄物師町に宿泊した。西暦一八一四年一月一五日のことである。鑄物師町は、鳥取城から米子へ向かう虎口にある。城下の内ではなく、外郭の商工地が宿泊地に選ばれたのは、経済的な理由によると考えられる。亭主は、加路屋久兵衛と米屋佐兵衛である。前回が加路屋喜兵衛と鍋屋喜十郎であったから、加路屋(賀露屋)は二回続けて亭主を勤めたこととなる。資産家であったと考えられる。町の中央を米子街道が通り鑄物師橋の下には、伯耆、出雲、但馬、越前などの船が絶えず行き交っていた。水運に恵まれ、物資の集積地であった。当町では、かつて鍋釜を製作する地域であったが、水運に恵まれていたため、問屋、銀札を経営する者も現れた。加路屋は、後に銀札業を営む豪商である。忠敬は、加路屋に二泊し、鳥取城下を測量した。

二、河原宿

鳥取城下を起点に、市街地を通過して因幡一宮の宇倍神社まで測り、翌日、千代川を遡って約十二*離れた河原宿まで測量を進め宿泊した。亭主は、太兵衛と源七。河原地内の測量に当たっては、上田家を取り仕切った。河原町に残る屋号に賀露屋がある。造り酒屋を営む旧家である。これを根拠として太兵衛宅に、忠敬が宿泊したと考えた。河原宿は三本の川が交わる千代川交通の要所である。賀露屋を始め米屋、御茶屋、秋里屋など鳥取鑄物師町と共通した屋号がある。屋敷も少な



現在の鳥取市鑄物師町

く宿場としては新しいものの物資の運搬の要路として重要な地域であった。

三、用瀬宿

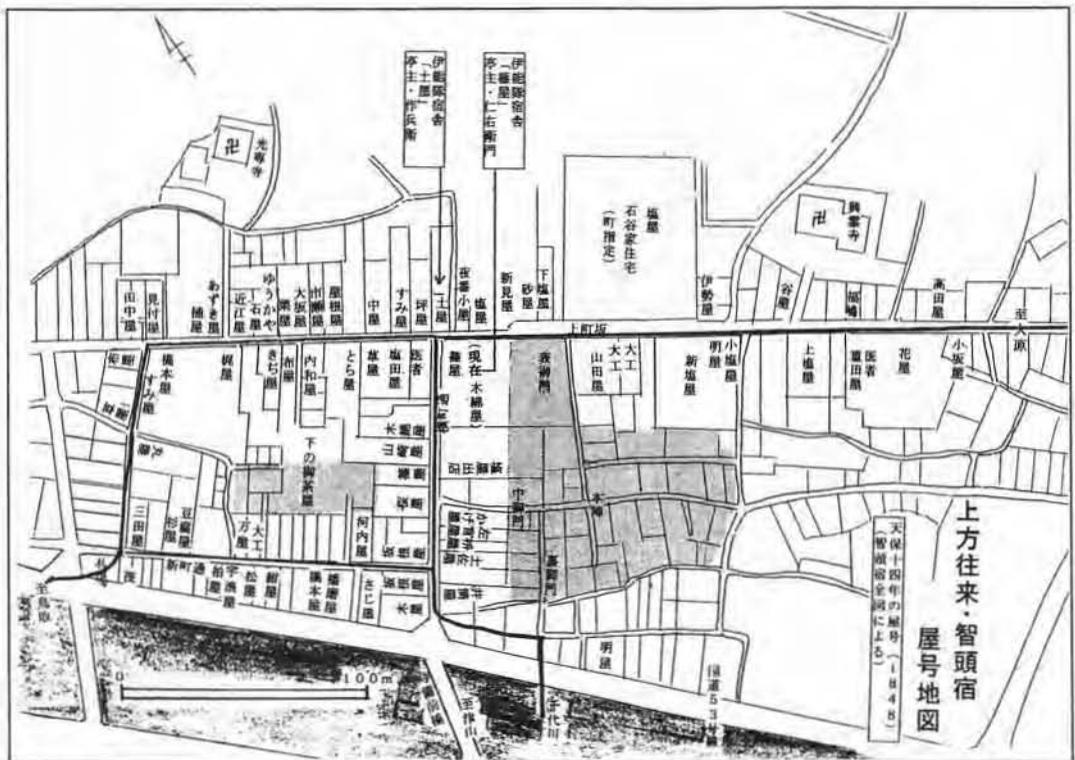
一月十八日、一行は用瀬宿に着いた。宿場は六百坪続く。河原町とは九*ほどしか離れていないが、智頭までの道程の中間地点であり、鳥取藩主の休憩地である御茶屋が置かれていた。参勤交代がない時も、御徒目付という藩役人が勤務した。約六二七坪(二〇六九坪)の広さ。敷地内には、山奉行所、馬小屋があった。亭主は、只吉と長四郎の二家が選ばれた。宗旨庄屋の玉谷又兵衛宅の隣である。用瀬は、智頭郡に属していたので、忠敬の元へ智頭郡大庄屋二人、宗旨庄屋二名が相次いで訪れた。伊能隊に提出した当時の資料の控えが玉屋宅に残っていた。それには、用瀬の人口、石高、神社仏閣などが記されていた。

四、智頭宿

一月十九日、伊能隊は智頭宿に入った。町並みは五百坪も続き、通りも四本あった。当時の触書が亭主を勤めた國米家に残っている。國米家は屋号を篠屋といい、本陣に隣接する大庄屋である。智頭には、上御茶屋、下御茶屋の二つの茶屋があり、上御茶屋には定番役人が、下御茶屋には、御徒目付役がそれぞれ勤務していた。上御茶屋を一般に本陣と呼ぶ。天保八年(一八三七)『智頭宿御茶屋絵図』によると、本陣は、居間(12畳)、二の間(12畳)、三の間(12畳)、広間(30畳)、玄関(12畳)、御膳部屋(4.5畳)、御坊主部屋(10畳)、御小姓部屋などを備えた大がかりな宿舎であった。伊能隊はここを起点に駒備方面の測量を行い、二泊後に津山方面に旅立った。

五、野原宿

備前街道の黒尾峠越えの宿場である。智頭宿から八*離れている。宿場は三百坪と短い。伝馬四匹、人足がおかれ、宿賃、荷物、人足な



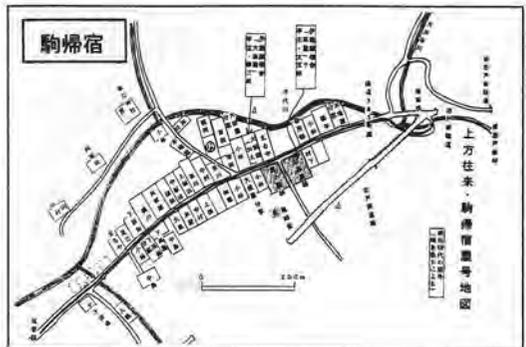
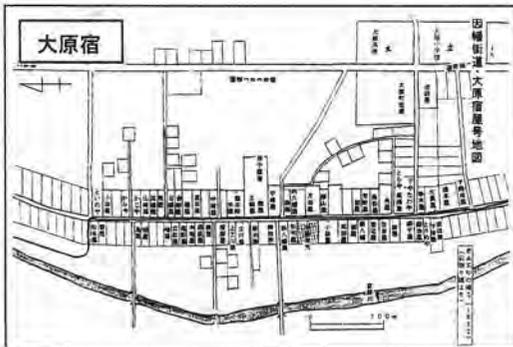
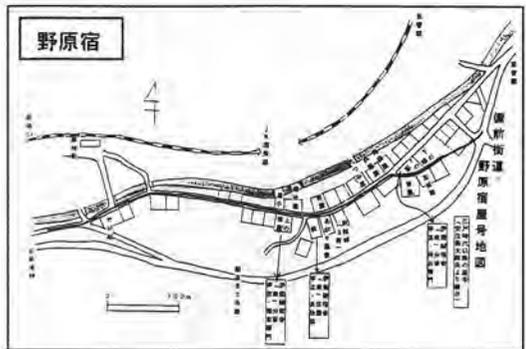
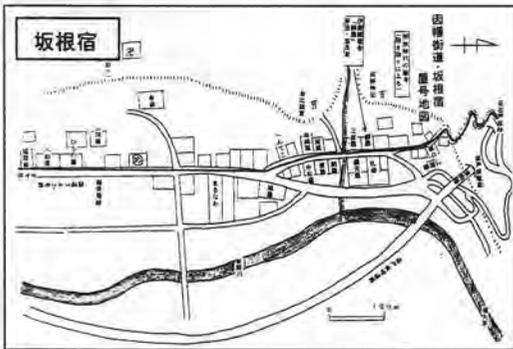
どに関する制札が立てられた。備前池田家と鳥取池田家は親戚関係であり早籠の往来も激しかった。一月二日に伊能隊が入り、現古谷家一族三家に分宿して泊まった。忠敬の訪問は希有のことであり、永く伝えられた。一行は翌日、美作の黒尾峠・馬桑宿を目がけて出発した。

六、駒帰宿

智頭宿から約十⁺離れた智頭街道最後の宿場である。交通の要所志戸坂峠を控えた宿駅である。伝馬九匹が常備され、参勤交代の一行も、旅人も、必ず休憩した。交通頻繁のため、安政六年(一八五九)に駅庄屋が任命された。江戸時代の家数は四二軒(文久三年・一八六三)。荷物問屋三軒、宿屋一軒があった。池田氏の休憩所として駒帰御茶屋がおかれた。天保八年(一八三七)「駒帰宿御茶屋絵図」によると、居間(8畳)、二の間(8畳)、広間(14畳)、御膳部屋(4.5畳)、御坊主部屋(6畳)、本陣家族の部屋などがあった。一月二十日に伊能隊が入り岡山県側の坂根まで測量し、駒帰に宿泊した。亭主は、文五郎と幸三郎である。小林敏克氏のお宅に位牌があり、亭主の幸三郎は、先祖であることが分かった。

七、志戸坂峠

承徳三年(一〇九九)因幡の国守に任命された平時範は、二月九日に京都を出発して、山陽道から上方往来をたどった。十日、十一日、十二日と激しい風、厳しい寒さの中、旅を続け、十三日には播磨の国府(姫路)に到着した。十四日朝、同地を出発、午後二時に志戸坂峠の麓、坂根の仮屋に到着。同地に宿泊。ここから因幡の国府へ使者を送り、境迎えの儀式の仕方を問い合わせた。翌十五日はみぞれ模様为天候。早朝、正服に身を正して黒毛の馬に乗り坂根を出発した。当時、鹿跡御坂(シシトノミサカ)といわれていた峠に着くと、下馬し迎えに出ていた因幡国府の役人達と対面した。役人達の自己紹介の後、



時範がこたえて、無事に式は終了した。時範一行は、再び馬に乗り智頭に向い、十時頃に智頭に到着。ここで、歓迎の食事を済ませ、夕方遅く因幡国府に無事到着した。この旅の様子を書いた日記を『時範記』という。この記録は、当時の出来事を知る貴重な資料となっている。

鳥取藩は、寛永九年（一六三二）に中原村に御制札場をつくった。制札には、住民の心得やキリシタンの禁止、駄賃の定めなどの内容が書かれていたものと推測される。当時、中原は、智頭往来の街道筋では、比較的大きい集落だったので、交通の要所として重要な場所であった。やがて、寛永十四年（一六三七）、御制札場は峠に近い駒帰に移された。

一 明治六年（一八七三）十二月に行政が大區、小区政となり、駒帰には戸長がおかれ、駒帰、福原を担当した。明治に入り、志戸坂峠の交通の重要性が高まり、明治二十年に岡山県知事の提唱により志戸坂峠の大改修事業が始まった。この改修により志戸坂峠を通行する人々や物資も増えて、駒帰は益々繁盛した。その後、駒帰では、明治二十四年、明治三十六年に大火があり、宿場町の建物は失われた。明治四十五年には、山陰線が開通して、志戸坂峠を通る人もだんだん減り、昔に比べ閑静となった。

しかし現在は、この道が再び脚光を浴びることになった。陰陽を結ぶ物資輸送の最短コースとして志戸坂峠道路が整備され、トラックやバス、自動車はひっきりなしに通過している。一方で、取り残された志戸坂峠道が、今もひっそりと残っている。近年智頭町によって峠道の整備がなされ、往時の面影を体験することができるよう。

八、坂根宿

文化年間（一八〇四年頃）戸数四十三。因幡街道最古の宿駅である。駒帰までの距離は、直線で2^サ。承徳三年（一〇九九）因幡国司、平

時範が任国に赴く際に、午後二時頃、坂根に到着した。仮宿が準備され、ここで美作国司藤原基隆の饗応を受けた。志戸坂峠までの山道は険しく、坂根側が十七曲がり、駒帰側が十六曲がり、坂根川は真つ逆様の峠道、駒帰川はなだらかであった。坂根は、本陣、問屋は庄屋が兼ね、伝馬が六匹、駒帰まで人馬とも行かない片駅であった。ここへは、津山からこちらへ向かって測量を進め、先に測量した地点に測点を繋げた。一八一四年二月九日に伊能隊が宿泊している、亭主は柳屋嘉兵衛（河野氏）である。

九、大原宿

大原宿は、吉野川の上流東栗倉と西栗倉の交差点に位置する。坂根まで約8^サ。古町、中町、下町に分かれる。古町は、かつて小原と呼ばれ、鳥取池田氏の本陣、脇本陣が置かれた。下入口と上入口に土塁が設けられ、鳥取藩主宿泊中は、「因幡中将様御宿」の札がたてられた。町並みは五百軒続き、幅員は四^サ、中央付近で七^サとやや広くなっていた。

伊能隊は二月十日に古町に入った。

一〇、平福宿

大原宿まで約十^サ。姫路城主池田輝政の家老、池田由之が利神城を改築した慶長年（一六〇〇）頃から城下町となり、江戸時代には、因幡街道最大の宿場町として栄えた。この頃の里謡に「大原夜出て釜坂越えて花の平福あさがけに」と歌われ、佐用川沿いに並ぶ土蔵群の家並みの美しさがうかがえる。町並みは千百軒続き、川沿いに細長く連なる。櫛形が三箇所もあり、城下町の形状も残る。伊能隊は二月



十一日に上町の新右衛門宅に宿泊した。

終わりに

伊能隊は、一日七[、]ほどのスピードで智頭街道の実測を進めていった。中国山地の起伏の激しいコースが続き、冬期間で積雪もあり測量は困難を極めたと思われる。智頭街道^{II}因幡街道沿いの宿場は、明治以降も発展し、現在まで引き継がれている。当時の商家、民家は、変貌しているものが多いが、屋号を引き継いでいるものもあり、当時の面影を現在に伝えてくれる。伊能隊のことは、文書に、あるいは伝承として残っている。とりわけ、野原では、大事件であったらしく、亭主を勤めた古谷家では子孫に「忠敬」の人名をつけた人がいた。また、現在まで忠敬の調査のことが伝えられている。伊能隊の測量の痕跡、地域でのエピソード等は見あたらないが、測点については、智頭宿での二街道の交差点、道標の場所が測量杭の地点と言え、忠敬の測量の痕跡を窺い知る場所となっている。

忠敬の痕跡を発掘したい。彼の足跡を追体験したい。そして、当時の宿場の復元をして、盛時の様子を知らいと目的で智頭街道をたどった。不十分な点もあるが、忠敬の宿泊場所、測量杭の地点も確認できた。宿場の町並みもおよそ復元できた。宿場町は、一律ではなく町屋型（用瀬、智頭、大原、平福）、農村型（野原、峠の宿駅型（駒帰、坂根）、水運交通の要衝型（鋳物師町、河原）などに分かれる。

忠敬は、これらの宿場町をたどり、どのように感じたのか伺い知ることができないが、江戸時代からの伝統を引き継ぐ特徴的な町並みが街道沿いに残っている。現在この宿場町の魅力を発掘する動きが始まっている。

（たなか よしお・鳥取大学教育地域科学部付属小学校副校長）

参考文献

- ★鳥取県 『鳥取県史七』
- ★中林保 『山陰の街道』
- ★鳥取県教育委員会 1989・3
- 『鳥取県歴史の道調査報告書第一集く智頭往来』
- ★千葉県 『伊能忠敬測量日記一』
- ★佐久間達夫 『伊能忠敬測量日記第五巻』



山郷小学校児童による伊能調査・平成12年7月
(智頭宿、上方往来と備前街道分岐点)

源空寺の忠敬墓碑銘拓本

伊能 陽子

『伊能忠敬研究』の第十号と十一号に「源空寺墓碑建立始末」として私がまとめたのはお墓に関する何通か、お寺への永代供養料・忠敬の病死届・忌服届そして石碑建立明細やその経費などを取り上げたものである。墓石に刻まれた大文字、小文字の代金までは計算してみたが肝心の碑文については全く触れなかった。

たまたま、墓碑銘に関する文献、大谷亮吉著・保柳睦美著・東博研究誌・跡見女子大紀要を検討し、それぞれに問題点を発見された植田浩一氏からお問い合わせを頂いた。勿論、源空寺にも何度も通われたが、墓石から判読することは至難とのこと。幸い明瞭な拓本が手元にあったので、その写真をお送りした。

植田氏に、一文字一文字を丁寧に確認したご労作をぜひ皆さんに紹介するようにとお願いしたが、「文字」に関しては現在の活字では表現不可能ということで、とりあえず拓本の写真そのものを掲載することにした。

——銘文の字句を解明したく、再三、源空寺にアタックしましたが、この拓本ですべて解消しました。それにしても今さらのように拓本の迫力に圧倒されました。ぜひ機関誌にのせて世に誤伝なからしめて下さい。——

植田 浩一

碑文は佐藤一斎、大学頭・林述斎の第一の門人。文字は関 研（関藍梁）当時一流の書家。そして碑文の最後の「廣群鶴鏹」は名匠石工廣瀬群鶴が刻んだということで、最高に豪華な墓石といえるだろう。なお廣瀬群鶴、通称は泉屋喜右衛門。いつみや喜右衛門署名の請求書「石碑正面大字八ツ 老字二付四匁ツ、代金弍分ト弍匁 碑文数九百六拾老字 老字二付五分宛 代金八両ト銀五分」を意識して、碑文の拓本を眺めて頂くのも一興かと思う。

源空寺墓碑・正面拓本



東河伊能君墓銘并叙

江都 一齊佐藤坦為文

君諱忠敬字子齊伊能氏號東河稱三郎右衛門晚稱勘解由北總香取郡佐原村人本姓神保氏南總武射郡小堤村神保貞恒之第三子出曾伊能氏伊能氏世為閭右族其先出於大和高市郡西田鄉大同中有諱景能者知北總香取郡大須賀莊居伊能村因以氏焉子孫蟬聯占其地至永祿中有諱景文者始徙佐原天正中為居民開肆貿易實君九世祖也高祖諱景利曾祖諱昌雄祖諱景慶考諱長由長由無子其配神保氏君之從祖姑也因丐君為嗣長由不幸蚤歿產頗荒君既來嗣慨然以幹蠱為志昕夕黽勉務儉素禁奢靡家眾百口以躬率先之天嗣三年關東大饑君為發私儲賑貸鄉里施及旁近村落多所全活六年又饑救之如初地頭津田甘州君並優賞之君好星曆至寬政六年委家事於子景敬躬獨來江都尚從事曆學當時所傳曆法君疑其

有所不合徧就曆家質之猶未釋然既而官會有改曆之舉召高橋東岡者
新自浪速來君執贄往見始聞西洋曆法理精數密宿疑乃解遂棄舊學之
推步測量之精東岡之門獨推君云寬政十二年閏四月官命君測量北陸
道及蝦夷地方東南沿海以定地度明年正月官賜君父子銀各十錠許佩
刀稱姓氏賞其於天明年內兩救窮民也享和元年三月又命測量伊豆相
摸二總常陸奧沿海六月又命測量出羽三越佐渡能登駿河遠江叅河
尾張沿海至文化紀元集地方各圖成一大圖進呈其九月官賞賜廩米擢
爲小普請組屬天文方既而又命測量山陽山陰西海南海四道壹岐對馬
二島官道及沿海十二年又命測量伊豆七島及箱根湖既竣事測量江都
府內十四年四月府內圖成進呈自蝦夷測量之初至此閱十有八年五畿七
道無地不涉遐陬僻壤盡測量而圖之最後有命集成寓內沿海輿地全圖

及度數譜行程記至文政元年齡七十有四罹病其四月十三日劇殆不起至
四年七月輿地全圖等成進呈以其九月四日歿官追賞其功賜廩米宅地
於掃忠誨以旌之君為人真率不修邊幅精力絕人每測量命下輒喜見顏
色不日而發乃躬歷險阻凌海濤奔走數百里風雨寒暑未嘗少沮喪何其
氣之邁而事之勤也哉所著有國郡晝夜時刻考對數表紀源術并用法割圓
入線表紀源法地球測遠術問答凡若干卷皆藏於家君先配長由之女繼配
桑原氏皆先歿得三男二女昆季並殤仲子景敬嗣亦先歿孫忠誨嗣君之葬
在城北淺草源空寺東岡君之塋域從遺囑也忠誨以狀來請余銘乃畧叙之
為銘曰源深以遠流長以疏善積之厚慶則有餘叩天之闔極坤之輿瘴烟毒
霧不能為瘡祈寒暑雨不能為痛乃如之人能有幾與貞珉可泐跡則不渝
正政五年壬午嘉平月下澣淡海關研書

孝孫忠誨立

廣群鶴銘

地域資料

伊能隊に付き廻った村役人の記録

―大野城市（福岡県）の高原家文書より―

河島 悦子

文化九年、九州二次測量隊が福岡県西部海岸より、佐賀県北西部を経て、鳥栖市から再度福岡領に入ったときの付添い村役人、現大野城市乙金の庄屋高原善四郎の手になるものである。

高原家は代々庄屋・大庄屋・戸長を勤めた旧家で、土蔵には大量の古文書が収蔵されていた。昭和五十年、家を解体した際、福岡県が緊急調査をおこない、延宝二年（一六七四）から、大正五年（一九一六）までの文書がマイクロフィルムに収められた。

そのなかに、「公儀測量方御領内往還筋測量御用下調子書上」「御笠郡測量方通行覚」の二点があり、「公儀測量方……」は往還筋に家居何軒、神社仏閣数、名所旧跡、各村内往還里丁数、村より見える高山よりの距離などが詳細に記され、福岡藩分間方山本源助・上野小八宛になっている。

今回掲載の御笠郡測量方覚は、『測量日記』九月二五日の条より読み合せるとおもしろい。太宰府市宝満山は八六八の低山ながら、全山岩石道が折り重なる修験道の山で、師をして「道狭く、險阻、鎖坂ニヶ所、長サ五間に十間、英彦山より嶮（ケン）なり」と記された難山だった。現在は足場が切られ、悪所は道が付け替えられ、少しは楽になったが、四十年程前までは相当にひどかった。山頂からは、現福岡市内、粕屋郡、西は糸島郡、南は筑後久留米、柳川地方が一望され地図作成上どうしても眺めておきたい山だったであろう。

伊能図、筑前で富士山のように、宝満山に集中する方位線は、山頂に向い各地から計った正真正銘の測線なのである。

（編集部注）ここに紹介する大野城市の旧乙金村庄屋の高原善四郎家文書は、以前から存在が知られていたが、全文を解読、掲載されるのは初めてではないかと思われる。河島さんの尽力で公開されることになった。内容は郡中付き廻りの記録で、測量隊の案内と問答が記されている。接遇模様の記録は多いが、付き廻りと測量隊がどんな会話を交わしながら歩いたかという話は珍しい。

高原（謙）文書 57 （表紙） 御笠郡測量方通行覚

一 坂部貞兵衛様九月二十五日朝六ツ時、田代より御入込被遊、当郡三国御小休被遊、夫より御測量ニて原田松屋卯右衛門方御小休被遊、矢張御測量ニて筑紫宮え御參詣被遊、下見村庄屋役宅え御小休被遊、夫より夜須郡二村並山家村抱まがた際迄御測量被遊、夫より同村舟町際より大また迄御測量相濟、御引返し、二村え御泊りニ相成申候

但三国より御入込の節、原旺迄青柳勝次様御付添被遊候間、私共えハ何たる御尋事も無御座候、猶又二村迄道筋ニても私共え何たる御尋事も無御座候

一 伊能勘解由様九月二十五日、田代より御入込、三国ニて御小休・御測量無ニて原田町茶屋御泊り、御尋事無御座候

一 門谷清次郎様・今泉又兵衛様・御弟子様方ともニ右同断、御尋事無御座、同所町茶屋ニ御泊り被成候

文化九年九月、第八次測量の途中、二四日田代町（鳥栖市）に宿泊した一行は、二五日から二八日まで四日間御笠郡を測過した。その間の測量経路、休憩場所と測量隊との問答の様様である。提出文書の形式となっており、本文書

はその控えであろう。

通行の様子と問答を洩れなく書き出すよう指示を受けていたものと思われる。筑紫宮への参拝が現れるが、藩士の青柳勝次(種信)が付き廻っていたから、村方には何もお尋ねはなかったという。

青柳は筑前の国学者で本居宣長の門下、浦方の身分の低い役人だったが、地理、地誌情報や国学に造詣が深く忠敬に厚く信用された。指名を受けて付きまわった。村方に質問が無かったのは当然だろう。

一 伊能勘解由様九月二十六日朝六ツ時、原田宿御出立、同所筑紫宮え御参詣被成、私共儀、鳥居迄御案内仕候、社内は掛り神主山田出羽より御案内仕候、右二付、御尋事等の義ハ同人より申上候半と奉存候

一 門谷清次郎様・今泉又兵衛様・御弟子様方共ニ右御一同、御参詣被成候、是又御尋事等の義無御座候

筑紫宮の鳥居まで案内し、あとは神職が引き取って案内したという。どここの社寺でもほとんど同様な扱いだつた。

一 原田宿口森の本と申所より御測量被成、夫より飯塚通り御案内申上候処、俗明院村の儀御尋被成候間、此所俗明院村と申上候処、青柳勝次殿より古跡の儀被申上候間、私共えハ外ニ御尋事無御座候

一 針摺川水上の義、御尋被成候間、平等寺村より流出候由申上候、里数の儀、御尋被成候間、凡式里半と申上候

一 針摺町惣右衛門方にて御小休被遊候て、夫より御測量無ニて二日市通り御通行被成、通古賀村抱染川より御測量被成、通古賀通り御案内仕、同村村下御測量の節、岩谷古城の義御尋被成候処、青柳勝次殿より御取合被成候、委敷事ハ不奉存候得共、同所の義被申上候様覚申

上候、右二付、私共えハ御尋事無御座候

地名、距離、水源は地元尋ねたが、名所、旧跡は青柳勝次の出番だつた。

一 坂本村抱閨屋町にて御昼休、夫より観世音寺村抱の内、都府楼の跡御案内仕、此所も青柳勝次殿より御付添ニて御咄等御座候、御引取、往還筋御測量被成、同所砥園社の義、御尋被成候間、砥園宮と申上候

一 宰府宿内坂部貞兵衛様御一同にて御測量被成、天満宮楼門迄御測量御座候、尤延寿王院より使僧御出被成、御橋の前より御案内被成候間、私共えハ何事も御尋事無御座候、御参詣相済候間、同所幸屋理平方え御止宿被成候

一 門谷清次郎様・今泉又兵衛様・御弟子様方ともニ御参詣の節、末社等の義、御尋被成候間、不奉存分ハ懸額の通申上候、夫より御引取、同所幸屋理平方え御泊被成候

一 梵天寺本蓮歌町と三条の境ニ御立置被成候て、御止宿被成候

梵天一本を町の境に立てたまま宿舎に入る。

一 伊能勘解由様九月二十七日、幸屋理平方え御居泊被成候

一 坂部貞兵衛様二十六日朝六ツ時、二村御出立、御測量ニて針摺町惣左衛門所え御小休被遊、夫より矢張御測量ニて紫村庄屋卯作所え御昼休被遊、同所より御測量ニて榎寺通り、宰府下町米屋長左衛門所え御小休被遊、夫より御測量無之ニて観世村都府楼跡御見物、同所より勘解由様御同ニて観世音寺戒壇院え御参詣、夫より宰府下町え御引返シ被遊、同所より勘解由様御一同ニ延寿王院前御池橋通り、楼門前蓮歌屋町ノ上の駒留迄御測量相済、夫より天満宮御参詣被遊、同町武右

衛門所え御泊り被遊候

但、針摺峠御小休所えハ御小休ハ無御座候、尤柴田川・染川・白川の儀、川名御尋御座候二付、夫々御答申候、猶又觀世音寺村旧跡等の儀ハ勘解由様青柳勝次様御付添被遊候二付、私共えハ何たる御尋も無御座候、天満宮御参詣の節も勘解由様御同道二付、青柳勝次様御付添二付、私どもえハ何たる義も御尋無御座候

測量は順調にすんだが、折角用意した休み所は使われなかつた。旧跡、社寺はもつぱら青柳の受け持ちである。

一 伊能勘解由様同二十七日、宰府理平方え御滞留被成、御付添御三人様方より御測量にて内山村農家え御小休被成、御測量にて宝満一ノ鳥居にて御小休、福藏坊御小休、同坊より南坊・富倉坊兩人御案内にて、講堂上宮迄御測量相済、楞伽院え御昼休被成、直ニ御下山にて内山村農家え御小休被成、同所より御馳走案駄二御三人方御乗り被成、宰府御泊り所え御入被成候

但、御登山の節、一ノ鳥居御小休所にて当所ハ古跡等ハ無之哉と御尋被遊候二付、北谷村抱内九重ノ原を申上候、謂れ御間被遊候間、太宰府式城跡と申上候、其外何さへ御尋事無御座候

忠敬は滞在、隊員達は太宰府の宝満山に登山。形どおり役僧が出る。

一 坂部貞兵衛様九月二十七日朝七ツ半時、宰府御出立にて同所三條口より御測量被成、北谷村抱只越次吉所にて御小休被成、夫より粕屋郡え御移り被成候、郡境より同郡御付添庄屋罷出、御付添申上候、炭焼村枝郷原田次作所え御小休被遊、夫より宇美八幡宮の鳥居前迄御測

量相済夫より御参詣被成、同所座主誕生寺にて御昼、同所より何れ方様御馳走案駄ニ御乗被成、御測量なしにて、当郡乙金村抱唐山にて御小休被成、矢張御測量なしにて、同村通り、筒井村庄屋善六所え御泊りに相成申候 但、御尋事無御座候

案駄は、字が違うが、篋輿（あんだ）のことだろう。竹で編んだ簡単な輿で、かつては戦死者、負傷者などが乗せられたが、この頃は町人籠として使われた。仕事が終わってから、宿へ移動する道中のサービスだった



一 伊能勘解由様同二十八日朝七ツ時、才府御出立、御付添三人様ともニ御馳走案駄にて御測量なし、榎寺二日市通夜須郡二村境迄御案内申上候、道筋何さへ御尋事無御座候

一 坂部貞兵衛様同二十八日朝七ツ半時、筒井村御出立にて山田村雜賞限え当夏博多より御測量被成候節、御立置被成候杭木より御測量被成、坂本村抱関屋迄御測量相済、同所清吉所にて御小休、直ニ御馳走案駄ニ御乗被成、同所より御測量なしにて、二日市町茶屋にて御昼・矢張御測量なし、夜須郡石櫃え御泊りニ相成申候

国分町口にて、石門の跡御尋被成候間、石居へ掛御目申候、猶又国分寺の儀、尼寺の跡・国分寺迄の道法御尋被遊候間、国分寺左ニ相見へ申候小藪の内にて御座候、道法ハ凡四丁と申上候、尼寺跡も矢張左の田ノ中ニ御座候由申上候、通古賀村抱荳の関跡御尋被遊候間、往還より右ニ御座候此塚の由申上候、其外御尋事無御座候

名所旧跡ばかり聞かれています。ここは青柳がいなかったらしく、国分寺、国分尼寺の説明をしています。

一 坂部貞兵衛様当郡筒井村御泊りの節、御家頼(ママ)様御兩人月代御頼被成候間、当村新蔵と申者え御月代為仕申候、苦勞賃として御老人前錢拾八文充被遣候間、御断申上候得共、是非受取候様被仰付候間、受取申上候

坂部の従者から月代(さかやき)を割るよう頼まれ、礼金を一人一八文貰う。断ったが、たつてというので受け取った。一両は四貫文、今のお金で一五万円とすると、一八文は六七五円となる。

一 永井甚左衛門様灸治被成度二付、子供二ても差出候様被仰聞候間、子供詮義仕候得共、何れも不調法者にて御用達不仕候間、善六方下女差出候処、灸治御仕廻被遊、小玉銀六分被仰付、頂戴仕候
一 御同人様御家様月代御頼被成候間、右新蔵え御月代為仕申候、是又錢拾八文被仰付候間受取申上候

永井甚左衛門から灸をすえたいと頼まれ、下女が出ている。家来から月代を頼まれ錢を渡される。考えられる風景だが、記録に出てくるのは珍しい。

右の通書上申候処少シも相違無御座候、以上

坂部左大夫様御付廻

御笠郡塔原村庄屋 曾六

伊能勘解由様御付廻

同郡乙金村庄屋 善四郎

同郡西小田村庄屋 要八

松岡太郎左衛門様

御役所

御笠郡中役割

御附添

西小田村庄屋

要八

乙金村庄屋

善四郎

若江村組頭

善吉

塔原村組頭

嘉六

同村庄屋

曾六

上古賀村庄屋

茂吉

牛頭村組頭

助次

筒井村組頭

興八

数取

大佐野村庄屋

幸次郎

大石村庄屋

宗内

通古賀村庄屋

善右衛門

白木原村庄屋手伝

半助

付添いは支援隊全体の指揮者。数取(かずとり)は測定値を記録する役だつたろう。

絵図面方道中方御案内

隈村組頭

和助

石崎村組頭

次作

随行する地元の地図係りと、道中案内役人の付き添いか。

御先払

中村組頭

武平

立明寺村組頭

彦蔵

阿志岐村組頭

夫武人

阿志岐村組頭

金右衛門

吉木村組頭 勘助

夫式人

行列の先頭を歩き、障碍を排除する役。馬糞などを取り除く掃除人足をつれる。羽織、股引を着用し、脇差を差したという。

御馳走案駄傘才判 牛頸村組頭 助七

上大利村組頭 権次

案駄を担ぐ人足の指図役。宰判は宰領くらしいの意味である。

梵天持宰判 筑紫村庄屋 良助

瓦田村庄屋 恵吉

ばんこ毛氈 本道寺村組頭 惣次郎

ばんこは縁台のこと。これと毛氈を持ち歩き、小憩の場所にセツトするグループである。

野風呂呂才判 古賀村組頭 新右衛門

野風呂はお茶の湯を沸かす道具。小さなお風呂の形をしていて、薪をくべて湯を沸かす。

御昼御小休請持 常松村庄屋 千七

武蔵村庄屋 嘉蔵

平等寺村庄屋 久良

畑詰村庄屋 卯助

お昼、小休み所の設営責任者。プレハブ小屋を運搬するような仕事で大変だった。

御朱印宰判 吉松組頭 次六

忠敬が所持する老中からの旅行命令の御証文を運搬する責任者。証文箱には隊員の現金も保管

され、金庫の役割もあった。

御休泊見ヶ 永岡村庄屋 彦三

山口触諸用聞 弥内

よくわからないが、休憩、宿泊が予定したタイムテーブルどおり、行われているかどうかを確認し、連絡する係りのようである。休憩しなかつたというような変更があつたら、直ぐ伝合を飛ばして、次に通報し計画変更させなければならぬ。

郡屋詰 原田村庄屋 喜八

山家触諸用聞 茂八

下大利触諸用聞 和作

人馬継 牛頸村庄屋 次助

牛嶋村庄屋 善次

部屋詰めは本部要員。人馬継は、人馬の宿継ぎの心配。伊能隊専用の間屋場のようなものだ。

御用物宰判 山口村組頭 甚六

牛頸村組頭 作右衛門

測量隊の通行に必要な、布団、食器類、三方、煙草盆など各種用品の管理者。

諸品諸払 立明寺村庄屋 卯右衛門

古賀村庄屋 市次

會計係りか。

御宿亭主 原田村町茶屋守 孫四郎

御宿引 御宿主より請持

磁石持 山口村組頭 兵次

通古賀村組頭 善助

測量道具持ち人足の指揮者。

絵図持 国分村庄屋 左平

瓦田村組頭 次右衛門

天山村庄屋 和七

参考となる村絵図、沿道風景図作成のための資材運搬係。

道橋請持 向佐野村庄屋 善平

坂本村庄屋 曳吉

道普請、仮橋の設置など通行筋の整備がおこなわれたが、設営班の指揮者。

文化九年申九月

以上のような指揮者の役割分担のあとには、個々の作業のための稼働一覧表が現れる。

中嶋村

六月朔日

一夫三人 往還間打入用 但し、廻見御用二付

一同三人 村抱切東西南北間打同断

事前に提出する村絵図の制作費用である。街道筋と村内の東、西、南北が測られた。

同十七日

一同三人 往還問数再改二付入用
一同三人 村抱切同断

問題があつたらしくやり直している。
八月六日

一同式人 御測量二付、往還掃除入用
一同四人 右同断口々人留メ

測量が始まるので、街道筋を清掃し、入り口
で通行する人馬を停める。

六月より八月二十五日迄

一夫四人 御測量二付、所々御継扶持

八月五日

一同式人 右同断往還手入用

武拾四人

以下、ほぼ同様である。特別な部分について
のみ注記する。

山田村

六月朔日

一夫三人 測量御用二付、往還問打入用

一同三人 右同断村抱切、東西南北問打入用

同十八日

一同三人 往還再改二付、入用

一同三人 右同村抱切

伊能隊提出用の村絵図作りである。やり直し
もあつた。人足延べ六人は少ない数だ。

八月六日

一同式人 博多より御測量二付、町内往

還掃除入用分

一同式人 右同断

一同四人 御測量二付、村口々人留メ

街道筋の掃除と村内の道路への通行を止めた。
九月七日

一同四人 山本源助様・藤本桂次様御見

分二付、内夫

藩の役人が見廻りにくると荷物運びなどの人
足が入用になる。村々は、このようにこまご

まとした人足の仕事が続いている。これら人
足には村の経費から安い賃金が払われるのが
普通だった。

同月二十七日

一同四人 町内御測量二付、掃除町内押へ夫

一同式人 筒井御泊り二付、火用心廻り夫

一同三人 右同断所々走り番

一夫式人 右同断石櫃村迄御扶持

八月五日

一同五人 右同断

一同五人 往還取繕入用

武拾三人

九月二十六日

一同拾五人 右同断乙金村境番所村口迄道

筋手入用分

一同式拾人 右同断前川飯橋掛方入用

一同拾人 九月二十五日より二十八日迄

出方庄屋より所々飛脚入用分

筒井村

六月朔日

一同三人 測量御用二付往還問打入用

一同三人 右同断村抱切、東西南北の

問打入用

一同三人 右同断再改二付、入用分
一同三人 村抱切再改の分

八月六日

一同式人 御測量二付、掃除入用分

一同四人 右同断往還口々人留メ

九月二十六日

一同式人 右同断掃除入用

一同四人 右同断口々人留メ

一同四拾人 坂部様御泊り節、内夫並

一同拾五人 所々はしり番

八月二十五日

一同六人 御組様御見分並庄屋中止宿仕候分

一同三人 四王寺山道村抱切問打

一同拾人 六月朔日より九月二十八日

迄所々扶持夫

一同九人 原田宿へ二十三日相濟夫御付二

テ夜須郡石櫃迄相勤二付、召運

九月二十七日

一同九人 右同断往還取繕並村内道手入分

武百五拾式人

瓦田村

六月二日

一同三人 測量御用二付往還問打入用

一同六人 右同断村抱東西南北問打

一同三人 右同断往還問数再改

一同六人 村抱切右同断

八月六日

一同式人 右同断往還掃除入用

一同四人 右同断村内口々人留メ
一同八人 御測量二付、往遠損シ所手入

一同拾人 右同断川越夫
御飯橋方入用
九月二十五日 八日迄所々御維持持送
水城村
六月四日 測量御用往還問打
一同三人 同所抱東西南北問打

一同拾式人 九月二十七日 往還掃除夫
九月七日 下大利村
六月二日 一同三人 御測量二付、往遠取繕入用
一同六人 山本源助様御昼所入用
一同三人 御測量二付、往還問打入用

一同拾五人 七月より九月二十八日迄御
繼状送り夫
同月二十五日 一同三人 右同断往還問數並絵図調子
二付入用分
八月五日 一同三人 右同断往還掃除入用
同月二十五日 一同六人 右同断四王寺峠道改入用

九月二十七日 一同五人 御測量二付、往還手入分
七拾四人 一同式人 右同断所々維持夫
一同六人 同月六日 一同三人 右同断往還掃除入用
同月二十五日 一同拾人 右同断六月朔日より十月迄
所々御維持持送り入用

白木原村
六月朔日 測量御用二付、往還問打入用
一同三人 村抱切東西南北の町打入用
一同三人 同二十四日 一同拾式人 測量方御用二付、一ノ瀬川越夫
一同三人 右同断往還問數再改二付、入用
九月二十六日 一同五人 右同断往還損シ所手入

六月二十五日 一同式人 右同断調子方二付、仕用間
和作召仕候分
八月六日 一同拾式人 右同断飯橋掛方入用
一同三人 右同断川越入用
一同式人 右同断口々人留メ入用
一同五人 六月朔日より十月迄所々御
維持送り夫

一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ
九月二十日 一同式人 右同断口々人留メ入用
一同五人 六月朔日より十月迄所々御
維持送り夫

一同式人 右同断村口々人留メ
一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ

一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ

一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ

一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ

一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ

一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ

一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ

一同式人 右同断往還掃除夫
右同断村口々人留メ

八月六日

一同式人 測量方宰府迄御出ニ付、手当の分
一同四人 右同断口々人留メ入用

九月七日

一夫三人 山本源助様御見分ニ付、入用

同月二十七日

一同六人 御測量の走り番入用
一同三人 右同断往還掃除入用

一同四人 右同断口々人留メ入用

一同式人 右同断町内押へ

一同拾人 六月朔日より十月迄所々御
繼状持送り夫分

一同八人 右同断往還損ジ所手入

坂本村
一 五拾四人

六月四日

一同三人 測量方御用ニ付、往還間打入用

一同三人 右同断村抱間打入用

同月二十八日

一同三人 右同断往還間敷再改入用

一同三人 右同断村抱再改入用

一同式人 右同断下調子ニ付、入用

八月六日

一同三人 右同断往還掃除入用

一同式人 右同断人留メ入用

一同拾式人 右同断閑屋御小休所入用

一同式人 右同断町内押へ

九月二十七日

一同式人 右同断往還掃除入用

一同式人

右同断町内押へ入用

一同拾五人 右同断閑屋御昼ニ付、入用分

一同拾人 右同断六月朔日より十月迄

所々御状持

一同五人 右同断往還損ジ所手入分

一 六拾七人

通古賀村

六月六日

一同三人 御測量方御用ニ付往還間打入用

一同三人 右同断村抱間打入用

一同式人 右同断下調子ニ付、入用

六月二十九日

一同三人 右同断往還再改入用分

一同三人 右同断村抱間打入用

九月二十六日

一夫拾式人 測量方御通駕川越夫

一同拾五人 右同断仮橋掛方入用

一同三人 右同断町内押え

一同四人 右同断村小路口々人留メ

一同拾人 右同断六月朔日より十月迄
御繼状持入用

同月二十六日

一同拾式人 右同断往還損ジ所手入分

一 七拾人

一夫拾三人 右同断緑川仮橋掛方

一同拾五人 右同断同所川越

一 九拾八人

紫村

六月五日

一同三人

測量御用ニ付、往還間打

一同三人 右同断村抱東西南北間打

一同式人 右同断下調子ニ付、入用

七月朔日

一同三人 右同断往還再改入用

一同三人 右同断村抱同断

九月二十六日

一同五人 右同断御測量の節町内押へ

一同式人 右同断掃除入用

一同四人 右同断口々人留メ

一同拾式人 六月朔日より十月迄所々御
繼状持夫

九月二十五日

一同式人 測量方御通行ニ付往還手入分

一同四人 右同断町内押え

一 四拾三人

二日市村

六月五日

一同三人 測量方御用ニ付、往還間打

一同三人 右同断村抱東西南北間打

一同式人 右同断下調子ニ付、入用

七月二日

一同三人 右同断往還再改間打

七月二日

一夫三人 右同断村抱間敷再改

一同六拾八人 右同断六月朔日より十月迄
所々御役所より御繼御状持

九月二十六日

一同六人 御測量の節、町内押へ

一同式人

右同断往環掃除

一同四人

右同断往還取繕夫

一同式人

右同断町内掃除

一同式拾人

右同断御昼の節、内夫

九月二十九日

一同拾五人

右同断御昼休入用

一同拾八人

右ハ御役所方両、三度御昼

御泊り入用

乙金村

八月二十四日

一夫拾人

測量御用ニ付、四王寺里数

一同五人

相改候節入用分

同月二十五日

一同五人

右同断御組様方並庄屋御見

一同八人

分の節昼々手当入用

一夫拾人

右同断八月二十日より十月迄御継状持

一夫拾人

右同断諸用開福岡行並所々

一夫拾人

出方の節召仕候分六月朔日

一夫拾人

より十月二十日迄

九月五日

一同三人

右同断原佐太夫様御見分の節入用

一同四拾人

右同断粕屋境より御越、筒

一同拾五人

井村境迄手入分

同月二十六日

一同八人

右同断唐山御小休所立方入用

一夫拾人

外二拾人八月十六日より二十六日迄御組

一夫拾人

九拾老人

一夫拾人

右同断往還手入分

一同式人

右同断往還手入分

方御見分ニ付、庄屋善四郎御付添ニての

運夫

乙金村

八月二十日

一夫三人

測量方御用四王寺道間打入用夫

一同三人

右同断村抱東西南北間打

一同拾人

右同断八月八日より十日迄

御継状持

御継状持

八月二十八日

一同式人

右同断御組方御見分の節、入用

九月二十六日

一同八人

右同断唐山御小休所俄の事

一同四拾人

故、夜中ニ指出候分

一夫拾人

右同断当村抱分道作夫

一夫拾人

右同断八月十六日より同二

一夫拾人

十六日迄御組方御見分ニ付、

付添中村恵内召運夫

片野村

七拾六人

六月十日

一夫三人

測量方御用ニ付、往還間打入用

一同三人

右同断村抱東西南北間打入用

九月二十六日

一同三人

右同断村抱並往還再改ニ付入用

一同式人

右同断往還掃除入用

一同八人

右同断六月朔日より十月迄

御継状持

一同式人

右同断往還手入分

乙金村

一夫百四拾四人

右ハ測量方田代より御入込ニ付、九月二十三日より左の面々原田より付添申上、夜須郡石櫃村迄召運候夫

乙金村庄屋善四郎・同村組頭藤七・瓦田

村庄屋恵吉・同村組頭藤吉・向次右衛門・

筒井村組頭与八・山田村同貞次・中村同

武平・通古賀村庄屋善右衛門・同村与頭

半六・同善助・坂本村庄屋良吉・通古賀

村組頭久吉・国分村同左平・下大利村庄

屋孫助・同村組頭仁助・直吉・上大利村

庄屋權次・白木原庄屋正蔵・同村組頭平

助・牛頭村庄屋次助・同村与頭助次・同

喜三次・作右衛門・畑詰村勘右衛門・御

用聞和作

門谷清次郎様

保木慶吉様

永井甚左衛門様

八月六日

一夫式拾人

測量方雜賞限迄御測量被遊

候ニ付、御馳走案駄指出シ

分 八月五日より八日迄

右同断当日・前日走り番並

所々状持

一同式拾五人

同月六日

一同式拾五人

右同断御昼宿の内夫

一馬式疋夫ニシテ四人

一 夫式拾人 右同断用心召寄候分
九拾四人
雜賞隈村
八月九日

一 夫式人 右同断二日市迄三宝熨斗持
八月十二日

一 夫式人 御組方御荷物送
一 馬式疋夫ニシテ四人
同月七日

一 同拾人 那珂郡より戻シ案駄五丁二日市迄
九月十五日

一 同六人 梵天二日市迄
同月七日

一 同六人 那珂郡より戻シ案駄三丁二日市迄
九月十六日

一 同式人 御組方御荷物二日市迄
一 馬式疋夫ニシテ四人
同月十八日

一 夫老人 御役所御状二日市迄
一 同老人 御組方御状二日市迄
同二十四日

一 同老人 右同断
一 同老人 井手久蔵様御先触二日市迄
一 同式人 右同断御荷物二日市迄
一 同五人 上野小八様御入用二日市迄
一 同五人 山本源助様御入用同所迄
一 夫拾人 ハ御組方様並大庄屋方より
の御状所々々の分
九月二十四日

一 同式人ハ藤本桂次様御荷物
六拾三人
二日市繼
九月九日

一 夫百六拾人 測量方大石迄御測量二付、
賄方荷物往来分
八月八日

一 同式人ハ 原田迄熨斗・三宝持送り
九月十三日

一 同式人 一ノ瀬万助様・松崎小平様御荷物
一 馬式疋 送り
九月七日

一 夫拾人ハ 原田迄宿案駄送ル
同十五日

一 同六人 同所迄梵天持送り
同十六日

一 同式人 御組様御荷物
一 馬式疋 原田迄送り夫
同十九日

一 夫老人 御役所御状原田迄
一 老人 右同断
同二十四日

一 老人 右同断
同二十八日

一 同老人 井手久蔵様御先触御状二村迄
九月二十八日

一 夫式人ハ 井手久蔵様御荷物二村迄
一 同五人ハ 上野小八様御荷物原田迄
一 同五人ハ 山本源助様同断

一 同式人ハ 藤本桂次様同断
十月七日
一 同拾人ハ 青柳勝次様・古田吉助様
御荷物送り

一 同拾人 築田尺太夫様御往来送り夫
一 同五人 井手久蔵様御帰り荷物送り
九月二十三日

一 同百六拾人 賄方道具往来持送夫
十月六日

一 同式拾人 上野小八様送り夫
一 同拾八人 山本源助様送り
一 同式人 藤本桂次様送り
一 馬拾五疋

一 同拾五人 右同断二付、入用六日より十日まで
諸所へ御状送り
一 同拾五人 右同断
一 夫五拾人 九月二十七日、二十八日用心夫
夫五百式拾八人
馬拾五疋 夫ニシテ三拾人
一 夫百式拾人 宰府より粕屋郡宇美迄御測量
二入用分
合夫式千四拾五人
馬八拾三疋

一 夫三拾八人

一 夫五拾人

(注) 四日間の測量のために使われた人足は二〇
四五人に達する。一日当り五一一名である。
用心夫というのは予備員で、この人数には
予備員を含んでいる。

伊能忠誨日記

(三)

佐久間 達夫

文政四年

三月 小

- 朔日 予、御役所へ行く。予、下河辺へ見舞へ行く。
- 二日 伊能七左衛門、津ノ宮先生入来。
- 三日 予、高橋侯、足立、佐藤、桑原、及び近所へ行く。
- 四日 予、御役所へ行く。四半時より八半時前迄に成田不動、蔵前を通行す。予等見物。
- 五日 予、御役所へ行く。昼時引く。
- 六日 予、佐藤へ行く。
- 七日 予、御役所へ行く。日蓮祖師、蔵前通行、予等見物。
- 八日 予、佐藤へ行く。
- 九日 予、御役所へ行く。津ノ宮先生、予、高橋侯へ行く。但し、先生は直に帰り、予は御役所に居る。伊能七左衛門、飯田へ行く。橋替の平左衛門来る。紙屋内義来る。
- 一日 予、御役所へ行く。広口彦蔵来る。七曜曆、例年の通り可レ被レ下由云う。
- 二日 岐阜の広口彦蔵来る。予対面。日食草稿、七曜曆を遣す約束す。
- 一三日 予、御役所へ行く。予、伯母、源空寺へ行く。伯母高橋侯へ行く。予、元服二十七日の由。
- 一五日 予、御役所へ行く。青木勝次郎来る。祖父(忠敬)の画像(注1)

を持参。東士川の祖母(注2)来る。

- 一六日 予、東士川の祖母の宿へ行く。下マキ十軒道也。久保木順蔵来る。予、佐藤へ行く。
- 一七日 予、御役所へ行く。岡田東輔(注3)、予の銭入れを求め持つて来る。御役所、圭表儀立つ。当年清朝道光元年と改元の由。
- 一八日 予、七時頃、津ノ宮先生と深川八幡へ行く。
- 一九日 予、御役所へ行く。武蔵国多摩郡百草村松連寺十八景有りと聞く。
- 二〇日 柏木音右衛門(注4)来る。川口、予の紙入れを求め来る。予、三宅へ祖父の画像の表具を頼みに行く。
- 二一日 予、御役所へ行く。高橋侯入来。
- 二三日 予、御役所へ行く。
- 二四日 小象限儀の屋根でき、小象限儀を立つる。
- 二五日 予、御役所へ行く。市野、予に出世大黒天をくれる。
- 二六日 予、紙屋彦次郎を連れ、佐藤へ行く。予、髪を洗う。
- 二七日 予、伯母、高橋侯へ行く。昼時後、予、元服。直に源空寺、足立左内へ行く。予、高橋侯へ鮮鯛一折、樽代百疋上る。高橋侯、予に御持服の裏を給う。予、前髪をする人、高橋侯のサムライ久蔵也。予又、高橋侯へ帰る。布施の御隠居入来。酒宴。六時半後帰る。予、今日熨斗目麻上下也。
- 二八日 予、藤田、紙屋、桑原、佐藤へ行く。柏木音右衛門来る。伯母紙屋へ行く。又、高橋へ御礼に行く。桑原へ行く。紙屋新兵衛来る。
- 二九日 予、御役所へ行く。浅草御普請でき、御作事奉行見に入り来る。

四月 小

- 朔日 予、加冠かかんの祝儀、下役衆へ酒肴を出す。八時後、初松魚かつぶ(鯉)を食す。紙屋内義来り手伝う。伊八料理。
- 二日 予、御役所へ行く。予、外煙草初める。
- 三日 予、佐藤へ行く。
- 四日 予、御役所へ行く。昼仕舞。開帳へ行く。
- 五日 足立左内来る。
- 六日 予、彦次郎を連れ、佐藤へ行く。
- 七日 予、御役所へ行く。
- 八日 予、佐藤へ行く。伯母、桑原へ行く。
- 九日 予、御役所へ行く。七時前、予、重太郎と開帳へ行く。
- 一〇日 予、高橋侯へ行く時に、堀田原より黒船町辺迄焼失。近火なれども、やや鎮まり、予、高橋の子息小太郎(注5)賢次郎(注5)御兄弟を船にて開帳へ行く。但し、伯母、船にて来り同船。見せ物出る。色々御目につけ、船にて御帰宅。予、伯母等間もなく帰宅。但し、伯母送り申す。間もなく帰宅。
- 一日 予、足立新宅へ行き、石坂六兵衛、足立重太郎、予右三人、八線対数校合。三本校合。不レ合は、以二数理一青雲改レ之。
- 二日 伯母、桑原へ行く。伊八来る。廻状来る(廻状文略)。
- 三日 今日校合。予、源空寺へ行く。又、足立へ行く。伯母、紙屋の人々と船にて源空寺へ行く。帰り深川八幡へ廻りし由也。
- 四日 予、用表、七曜推歩法写し成る。
- 五日 予、御役所へ行く。
- 一六日 福嶋留吉来る。松平伊豆守侯の家臣也。
- 一七日 予、足立へ行く。校合。

- 一八日 予昼後、高橋侯へ行く。八ツ時後帰る。佐原大工治兵衛来る。
- 一九日 予、足立へ行く。校合。八半時後、足立、予、石坂、其外式人連れにて医学官へ行く。

- 二〇日 大野弥三郎来る。福嶋留吉、アンカ磁石請取に来る。
- 二一日 予、御役所へ行く。
- 二二日 玄長の子、左門来る。
- 二三日 予、御役所へ行く。
- 二四日 紙屋内義来る。
- 二五日 予、御役所へ行く。辛巳正月十七日より今日までに、総校法、恒星とんせい推稿四・五、二冊成る。
- 二七日 予、御役所へ行く。左門、弁慶橋へ帰る。足立家内、新宅へ引越す。
- 二八日 予、足立へ行く。四時頃より佐藤へ行く。

五月 大

- 朔日 予、御役所へ行く。
- 三日 御役所へ予行く。
- 五日 予、高橋侯、足立、桑原、佐藤、其外近所へ行く。持田勝助、石渡鐘太郎病氣の由、不レ来。
- 六日 渋川より人来る。予、佐藤へ行く。
- 七日 予、御役所へ行く。
- 八日 今夜、予、先生同道、薬師へ行く。
- 九日 高橋侯入来の由。予、佐藤へ行く。
- 一〇日 佐原の浄国寺入来。永沢万兵衛来り泊り居る。
- 一一日 予、万兵衛の新石町茶屋にて、浄国寺弁次郎を待つ。九時頃

同人来る。直ちに渡辺犀輔さいすけ(渡辺清藏・注6)へ行き、永沢万兵衛へ永沢治郎右衛門家督相談り、弁次郎は太兵衛方へ帰り、

相続を願う。犀輔承知の由。予、万兵衛直に帰り、浄国寺・弁次郎と谷中へ行く。

一二日 予、御役所へ行く。

一三日 伯母、予、源空寺へ行く。予、佐藤へ行く。林講休み。其故者チク弟子泰八と云う者、水野様へ迎えしに成りし故、先生同道行きし由。

一四日 今朝、永沢万兵衛帰国。伯母、桑原へ行く。永沢兵輔来る。即ち弁次郎改名也。

一五日 予、津ノ宮先生と大橋玄ユの宅へ行き、それより水戸様上屋敷御庭拝見に行く。惣連おんづら八人。それより帰り、予、津ノ宮先生両国開帳へ行く。

一七日 今朝、津ノ宮先生帰国。予、保木、船迄送り行く。

一八日 予、御役所へ行く。上州、小野良助来りし由。

二一日 予、佐藤へ行く。又、渋川へ行く。当、助左衛門養父注7病氣故也。

二三日 予、佐藤林講へ行く。大野弥三郎来る。七曜、及び日食推稿、岐阜へ遣す。

二四日 予、足立へ行く。校合。

二五日 予、御役所へ行く。今日折句開日也。

二六日 予、佐藤へ行く。先生風邪、句釈休み。二十八日も休み由。

二八日 伯母、紙屋へ行く。坂部八百助母来る。伯母、予、箱田等、船にて両国へ行く。

三〇日 予、足立へ行く。八線大数校合終る。

六月小

朔日 予、暮頃より深川八幡へ行く。

二日 伯母、紙屋へ行く。今日浄瑠璃じようるりあり。六時より行き、丑時後帰る。

四日 予、御役所へ行く。对数表、恒星推稿、今日より初る。

五日 予、御役所へ行く。序文下書、津ノ宮より来る。飯嶋与衛門、筆工ひつこうに来る。

八日 青木勝次郎来る。今夜、青木、保木、箱田、予、涼みに行く。

予、渡辺に頼みし四十五ケンの算盤そろばん来る。

九日 予、足立へ行き、对数表校合。

一〇日 今朝、青木来り御用手伝い泊り居る。

一三日 伯母、予、早朝源空寺へ行く。伯母、高橋侯、下河辺、足立へ行く。予、佐藤へ行く。

一四日 予、御役所へ行く。渋川助左衛門養父死去の由故、直に予、足立親子同道、渋川へ行く。帰り予、重太郎、石坂へ行く。

予、足立重太郎同道にて足立の宅へ帰り、衣装等持参。但し、予の迎えの人来る。同道帰宅。高橋小太郎入来。同宿。

一五日 予、重太郎、小太郎等、早朝出立。品川東海寺へ行く。昼時前葬式すむ。川口兄弟、高橋小太郎、重太郎、予、同道、帰路の大木戸にて休息、此处にて別れ三人同道、四番橋少し前迄行く。此所にて別れ、小太郎、重太郎浅草へ帰る。

一六日 三宅来る。紙屋新兵衛、内義来る。

一七日 予、足立へ行く。校合。大数表校合終る。

一九日 予、御役所へ行く。足立にて狼煙番付を借りる。渋川侯より御紙面至来。十七日退夜故来るよう。足立、高橋侯一人も行

かず故、予も行かず。

二〇日 夜具等土用干し。紙屋内義、新兵衛来る。

二二日 高橋侯入来。

二四日 谷東平注(8)来る。

二六日 昼後、予、佐藤へ行く。先生いわく、来る七月下旬、美濃の方へ行き候間、小遠鏡よく見え候を借りたき由。寺沢善蔵来る。

二七日 予、御役所へ行く。高橋侯、田中良之助娘子を貰い養う。

二八日 予、佐藤へ行く。小目鏡持参す。

二九日 早朝、予、佐藤へ行く。高橋侯の序文、高橋遣し候由、先生云う。紙屋内義来る。

七月大

二日 明日、狼煙の由、相知る。伯母、高橋侯へ行く。

三日 予、高橋侯、足立に行く。四半時、予、足立夫婦、奥様、次郎、太郎様、チヨウ等同船、靈岸島前迄来る。伯母の船に逢う。直に深川土橋、平清へ行き、狼煙を見物。紙屋新兵衛も来る。八時後、新兵衛帰る。七時過、伯母一人留守居にて、皆八幡へ行く。帰り夜の合図も見仕舞。此川岸にて別れ、人々は浅草に帰り、予、伯母は直に帰る。四時也。此夜より先生病気なれども、久しき約束故、奥様へ遣す。

五日 伯母、高橋侯へ病氣見舞に行く。暮頃帰る。野帳内にて御願の由定る。長谷川十兵衛来る。心願書を明朝迄に差出可^レ申由云う。但し、十兵衛方へ遣し候様。此事浅草へ聞え差出候文書、下河辺明日持参の由。

六日 保木、長谷川十兵衛へ心願書を持参す。

七日 予、高橋侯、足立、佐藤、桑原、柳屋など近所へ行く。四ツ時後帰る。

八日 予、御役所へ行く。高橋侯入来。

九日 予、御役所へ行く。八時前早仕舞。三宅来りの由。道にて逢う。

一〇日 五時過、下河辺、永井、門谷、吉川、予、大手より御中の口へ行く。高橋先生を待つ。先生来り、程なく大広間へ京より西の方、大図十四巻開きつく。中図、小図、又つく。御老中、若年寄御覽被^レ遊。又、諸巻巻き納め、御目付衆へ伝言し、直に諸箱を置き帰る。八半時過帰宅。(地図上呈・注9)

一日 長谷川十兵衛来る。白木屋通いとして来る。伯母、桑原へ行く。永井、中図を津ノ守(撰津守か)様へ持参。高橋先生請取差出す。伯母、八時過、又、高橋侯、及び源空寺へ行く。

二三日 予、箱田、佐右衛門を同道、三人池ノ端へ行き、蓮飯を食う。

予、箱田と別れ、予、佐右衛門、源空寺へ行く。又、予、足立、下河辺へ行き、四時後帰宅。

一四日 地図、突手本、風入れる。

一五五 佐右衛門帰国。予、高橋侯へ行く。

一六日 今夜、加納屋治兵衛来る。

一八日 予、伯母、加納屋、箱田、岡田等、船にて佃島沖へ狼煙見物に行く。但し、今日は江戸の狼煙。四ツ時頃帰宅。

一九日 予、御役所へ行く。昼過、紙屋彦次郎来る。今日より奉公人同道にて伊八は家に帰るつもり。

二〇日 予、高橋侯に行く。御役所浦野に曆象考成表五、借用し帰る。

二二日 曆象考成表卷五校合。

二二日 予、御役所へ行く。加納屋治兵衛同道行く。先生留守故、足立に逢う。加納屋綿宅。儀象考成、文政八年無年数、借りて帰る。但し、石坂六兵衛推正の蔵書也。

二三日 安岡玄修来り、近々帰国の由。但し、大病にて平癒趣帰国。宇田川云し故に帰国の由。早朝、イク帰国。儀象考成二十枚写す。

二四日 儀象考成、朝より昼頃迄に二十枚写す。又、二三枚写し箱田に頼みし紙数五枚半、先に出来る。

二五日 予、御役所へ行く。帰路、伴伝四郎と同道、北嶋迄来る。

二六日 予、七半時頃帰宅。今日又、佃島、狼煙あり。

二八日 予、御役所へ行く。恒星推稿八成る。内、土星一星未成。

八月

朔日 予、近所に礼に行く。

二日 予、御役所へ行く。先生入来。但し、津ノ宮先生也。

三日 予、御役所へ行く。渋川一斉様四十九日の由。津ノ宮先生、加納屋、飯田町へ行く。加納屋は帰る。

四日 加納屋、飯田町へ行く。津ノ宮先生、加納屋、暮頃帰る。

五日 渋川侯入来。

六日 予、御役所へ行く。昼仕舞帰る。津ノ宮先生帰国故也。行徳川岸にて逢い暇乞い。神田御屋敷より手紙来る。渡辺犀輔、中安辰之進(注10)兩名にて、佐原居、屋敷願の義へ、御とがめ也。故に加納屋、高橋侯へ行く。

七日 予、保木、神田御屋敷へ行く。加納屋、高橋侯へ行く。

八日 加納屋、保木、神田御屋敷へ行く。

一〇日 伊能七左衛門、同平右衛門(注11)兩人来り泊る。神田御屋敷より手紙来る。此間、加納屋来り、談じ候儀を口上書に認め、差出すべき由。

一一日 伊能平右衛門、神田御屋敷へ行く。昨日、御手紙の旨の口上書認め持参。御屋敷云う。此間、加納屋、高橋侯へ行き、御はなしの趣を書加え、明朝迄に持参可致由也。高橋侯息女三回忌也。故に伯母、高橋侯へ行く。高橋侯の御話、屋敷へ書出し如何可_レ有也を問う。先生いわく、不_レ同候。しかし、初め屋敷より三治郎方へ来りし手紙、予に見せると云へど也。柏木音右衛門来る。

一二日 予、御役所へ行く。伊能七左衛門、平右衛門、御屋敷へ口上書持参いたす。相すみ。高橋侯、後の口上不_二申上_一、伊能平右衛門、今夜不_レ帰。

* 八月十三日より十月八日迄は欠落。

十月九日より十二月三十日迄は、「掌冊」に記されている。

十月

九日 予、桑原養純(注12)、箱田左太夫、紙屋彦次郎、半次、七ツ半時頃、江戸亀嶋出立。此時晴天。行徳川岸に至る。時に送る者は、紙屋庄蔵、新五郎、金杉才次、伊助は扇橋先迄、同船送る。永代橋に至る時曇天。小名木川にて夜明け。四時頃、行徳しがらき屋へ着。文蔵、久兵衛、此所迄来たり待居候故、召連れて半次を返す。時々小雨、直ちに止む。予、本馬に乗

り、養純、彦次郎、軽尻に乗り、九ツ時頃、八幡富田屋へ着。予、養純、左太夫、彦次郎、久兵衛、歩行にて九ツ半時、釜ヶ谷江戸屋へ着。昼食。雨降る。予、養純、左太夫、彦次郎、馬にて七時後白井門屋へ着。右四人、又、馬にて夜の五ツ時頃、大森森田屋へ着。四人歩行にて四ツ時頃木下壁無屋へ着。

伊能平右衛門、此所に待居候故（平右衛門、布川えも行きし由）此所にて入湯し泊まる。伯母、地主隠居、速駕にて、暮前木下へ着の由。出立は、予等出立後也。供は伊八也。

一〇日

早朝乗船。出船は三双也。内一双は、伊八、文蔵乗り、駕は予物。一雙は、久兵衛乗り色々（いろく）に持（も）之。金井津にて中食。此所に稲荷有り。此山にて、初茸を取る。但し二ツ。結佐村迄向い船四双来たり待居候間連船、又、一雙来る。此四双は、橋本、田宿、仲宿、寺宿の者也。一雙は、左右衛門乳母ババア等也。但し、此一雙は、結佐村迄来たりし四双の内也。川口迄、た印、て印等の提灯にて向（むか）えに來たり付に賑やか也。夜の六半時前、佐原本家へ着。人混みにて大騒ぎ。伊能帯刀（注13）、七左衛門、永沢治郎右衛門（注14）等待居る。牧野の斎藤も待受に來たる。

龍ヶ崎のコト來たる。但し、久兵衛乗りの船に乗り來たる。今夜は、御座敷にて惣て寝る。

一日

伯母、地主の隠居、コト等、隠居へ引つ越す。養純、予、左太夫等、納戸へ引つ越す。左太夫、横川岸へ行く。但し、七左衛門宅也。彦次郎、新町祖父の方へ行く。祝儀の人、度々来る。七左衛門同道箱田帰る。

二日

予、箱田、養純、地主隠居、伊八、彦次郎、加治屋加兵衛、

香取大明神へ参る。予、加兵衛を召連れ、栄吉案内で裏道より田宿に出て行く。彦次郎は道にて箱田等に逢い同道す。道にて、予、箱田、養純等逢い同道。香取に至り桜の馬場にて休息し帰る。永沢治郎右衛門来たり居る。上総の飯高惣兵衛の弟・政四郎（注15）來たる。又、正作來たる。中村の藤右衛門母、及び子來たる。

一日

予、朝入湯。神保忠右衛門（注16）來たる。牧野の隠元病氣にて、代わりに勝徳寺來たる。外に僧五人來たる。粥を出し、後、經を読む。御膳出る。久保木太郎右衛門來たる。予、左太夫、養純、太郎右衛門、七左衛門、伯母、コト等は、納戸にて御膳。御膳すみ僧等帰る。予、箱田等、大勢にて牧野観福寺に至り焼香し、仏參し帰る。

二日

五半時頃、地主の隠居、養純、ハツ、彦次郎、上総の惣兵衛の弟政四郎等、船にて鹿島、銚子へ行く。但し、彦次郎は、左官屋と鹿島而已（のみ）にて帰る積もり。箱田、伊八、津ノ宮久保木太郎右衛門へ行き、鳥井川岸より養純、地主の隠居等の船に乗り、鹿島、銚子へ行く積もり。神保正作帰る。妻、臨月の由故。予、上下にて永沢治郎右衛門、同仁兵衛、同半右衛門、同太兵衛、同忠右衛門、同半十郎、伊能幸左衛門（注17）、鍵屋藤左衛門、永沢藤次郎宅へ行く。帰り中食。又、予、上下にて伊能茂左衛門（注18）本屋新左衛門、伊能平右衛門、遠城寺治郎左衛門、伊能彦作、伊能七左衛門宅へ行く。今夜、永沢の後室、おマチ兩人來たる。可成宗順來たる。永沢仁兵衛母來たる。昼後晴天。今夜九ツ時頃彦次郎帰る。伊能七左衛門來たり困甚。

一五日 伯母、船にて津ノ宮久保木太郎右衛門へ行く。帰る。親類、役人等呼び酒飯を出す。惣引きは、夜四ツ半頃也。

一六日 今日、外より手伝いに来たりし人、又、料理人等、酒飯を出す。津ノ宮先生来駕。

(つづく)

注 釈

注 1 伊能忠敬画像

忠敬の肖像画の筆者は『伊能忠敬』(岩波書店)の編著者大谷亮吉氏が、「伊能忠敬日記」の文政四年三月十五日と、同三月二十日の条から「青木勝次郎の描きたるものの如し」と記したことによって、青木勝次郎だろうといわれている。

しかし、肖像画の上部の「画賛」の筆者である久保木清淵家では、清淵が漢学者であったので、肖像画と賛をかき(併題)、賛の方に筆者名を記したのだと、伝えられている。

伊能忠敬の画像

(佐原市所蔵)



伊能忠敬の画像には、忠敬の坐像の上に「賛」が書かれている。

○伊能忠敬肖像画の賛

○読み方

導知篤久保木清淵拜書

能令余慶 在見孫

家門業を修え 前烈より篤し

知是勤渠 不朽事

地域図を成し 国恩に報ゆ

地域成図 報国恩

知る是れ勤渠 不朽の事

家門修業 篤前烈

能く余慶して 児孫に在らしむ

○解説

家業をおえ、前々からの家の事を守ってやったのである。その仕事は、地域の図を作り、国恩に報えたことである。

よく勤めたことが、不朽の事であった。

よく仕事をして、喜びが、子孫に伝わる。

おろかな弟である久保木清淵拜書。

忠敬の「画賛」は、左から右へと書かれている。普通と反対に書いているのは、右から左へと書くと、忠敬の額に自分の名がきて、忠敬に対して失礼になるといつたことからの配慮である。このような賛の書き方は、林子平肖像にも見られる。(久保木良氏談)

注 2 東土川の祖母(小川武津)

忠敬の母・リテの実母。上総国東土川村(現東金市宿)の人。一ノ宮村吉野源七の姉で、小川省義に嫁ぎ、一女二男を儲ける。文政四年十月七日、六九歳没。法名は、本具院妙性日道信女。

注 3 岡田東輔

名は道正、通称東輔。高橋景保の手付下役。

注 4 柏木音右衛門

柏木久兵衛の親族。佐原村田宿居住。柏木乙右衛門の嫡子で、出家名周道房という。観福寺の弟子。弘化三年四月二六日没。法名は、権律師覚映。享年五三歳。

注5 高橋小太郎・賢次郎

小太郎は、高橋景保の長男で、名は景僕という。天文方見習。父の事件に連座して、存命ならば遠島となる。將軍家治の五十回忌で特赦となり、山路諧孝の手付曆作測量御用手伝いとなる。元治元年六月二四日没。法名は、景僕儒翁居士。享年五九歳。賢次郎は、小太郎の弟で、天保十一年六月没。

注6 渡辺犀輔(清蔵)

佐原村領主、津田氏の家臣。江戸在住。

注7 渋川富五郎正陽(一七七五〜一八二一)

渋川景佑(高橋至時の二男)の養父。川口善左衛門の二男。寛政十一年に天文方となる。文政四年五月、四七歳で没。

注8 谷 東平(一七七四〜一八二四)

備中国大江村(現井原市大江町)の谷正純の子。本名元純、諱以燕、号東平といった。数学を松岡能一に、曆学を麻田剛立に学んだといわれている。文化八年閏二月、忠敬が備中・備後の測量のときに随従した。文政七年八月五日、江戸にて没。享年五一歳。

注9 大日本沿海輿地全圖・実測録の上呈

伊能忠敬の死後、沿海地図の作製は、天文方と久保木清淵などに引き継がれ、文政四年七月一〇日、大図、中図、小図、それに「大日本沿海実測録」十四巻が幕府に上呈された。

注10 中安辰之進 佐原村領主、津田氏の家臣。

注11 伊能平右衛門

伊能家の親族。佐原村下宿に居住していた。

注12 桑原隆朝如弘

忠誨日記の文政四年十月九日付に登場する養純は、桑原家四代隆朝如弘であろう。

注13 伊能帯刀

伊能七左衛門の六代成美の号を帯刀といったのではなからうか。

注14 永沢治郎右衛門(長沢次郎右衛門)

佐原開拓者の一人で、淨国寺(佐原市寺宿)の開山者である。忠敬なき後の忠誨の江戸、佐原での生活を一族あげて支援していたようである。忠誨の時代は、俊順が文化十一年三月に七一歳で没しているので、その後を継いだ俊寿(永沢半右衛門の子)であろう。

注15 飯高惣兵衛君露の弟・政四郎

飯高惣兵衛尚寛の孫にあたる惣兵衛君露(幼名吉太郎)の弟を政四郎といった。

注16 神保忠右衛門(一七六四〜一八二四)

忠敬の父出生の家の九代目の当主信敬の通称である。信敬は、明和元年に誕生し、元服時に忠敬に名付親になって貰ったといわれている。俳号は吟松という。文政七年、六一歳で没。

注17 伊能幸左衛門

忠敬が佐原の伊能家に婿養子に入った当時、伊能家の後見人であった伊能七郎右衛門豊秋の二男である。幼名を七之助、為右衛門。佐原村新地に分家し、幸左衛門と称した。

注18 伊能茂左衛門

茂左衛門は、現在の伊能忠敬記念館の敷地の所に居住していた。楯取魚彦の出生宅。

新收藏の伊能家資料が公開

伊能忠敬記念館

重要文化財に指定されていた伊能忠敬に関する資料は、昭和36年4月に伊能家から佐原市へ寄贈されましたが、それ以外にも地図作りの材料となった各地の地図類や下書き地図などが、伊能家には多数伝えられていました。それらの資料が平成15年4月に新たに寄贈されましたので、今回の収蔵品展ではそれらの資料の概要を紹介します。

また、この資料には忠敬に関するもの以外に、江戸時代の佐原村や伊能家の家業に関する古文書や生活用具も含まれており、当時の佐原の様子がうかがえるそれらの資料もあわせて紹介します。

□主な展示品

- ・伊能忠敬関係
 - 伊能図下書き奇図、測量亀絵図、測量下図、参考絵図
 - 佐原村関係古文書
- ・水運、市場、祭礼、十六島の開発
- ・生活用具
- ・衣類、調度
- ・その他

刀剣類、算木、版木

□期間 15年10月4日～12月7日

なお、今回予定されていましたが企画展「香取の和算」は新收藏の伊能家資料整理が順調に行われましたので収蔵品展に変更になりました。



伊能忠敬130年祭開催時の佐原駅前

(昭和23年・伊能家提供)

第二回企画展「伊能忠敬顕彰と佐原の人々」のよう

展示は9月28日で終了

今年、伊能忠敬が国から位を贈られてから120年目に当たることから佐原の人々が実施した忠敬顕彰に関わる事業について紹介しました。大須賀庸之助と贈位

伊能忠敬の名が全国に知られるようになるのは国から位を授けられたことがきっかけでした。明治16年(1883)2月に忠敬は正四位の位を贈られ、明治22年には位を記念して東京の芝公園内に「贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表」が建設されました。

この事業に地元佐原で尽力したのが香取郡長大須賀庸之助でした。彼は忠敬の墓碑銘の拓本や佐原の清宮秀堅が書いた伝記、自ら記した伝記等、忠敬の事跡に関わる資料を添付し、千葉県に忠敬の贈位を願

い出ています。また、記念碑建設資金を寄付し募金も行いました。

蒲宮秀堅

江戸時代末期から明治初期の学者。文化6年(1809)10月1日佐原に生まれました。領主津田氏と幕末に佐原を領した佐倉藩から苗字帯刀を許されています。佐原にあつては道路改修や新田の境界確定に尽力し、明治12年(1879)に亡くなりました。

代表的な著作に『下総国旧事考』があります。香取郡長大須賀庸之助が忠敬贈位願に添付した「伊能忠敬伝」はこの著の中に含まれています。その他、『近古詩抄』『北総詩話』『地方新書』『雲姻略伝』など多数の書を著しました。家は伊能忠敬記念館近くに今も残っています。

海鹽錦衛と忠敬記念会

海鹽錦衛は旧制佐原中学校(現在の千葉県立佐原高等学校)の初代校長です。彼は忠敬を生徒の修養のための素材としてとりあげるため、大谷亮吉と協議し学校の年中行事として記念会を立ち上げようとした。海鹽は間もなく他校へ異動しましたが後任の校長の下で明治45年(1912)6月11日第一回の記念会が開催されました。

第一回目の記念会では海鹽らが講演し、忠敬の地図、測量器具、著書や忠敬の石膏像などが学校に展示されました。

75名の発起人と100年祭

大正6年(1917)伊能忠敬没100年を記念して佐原の観福寺の墓前で法要が行われました。後に帝国学士院(現在の日本学士院)から『伊能忠敬』を出版する大谷亮吉やその監修者長岡半太郎、帝国学士院長菊池大麓らも参列しています。

また100年祭を契機に伊能忠敬の銅像を建立しようという機運が盛り上がりつつありました。この後伊能忠敬の顕彰は10年ごとに定期的に行われるようになりました。

600余名の寄付者と銅像

今も佐原の諏訪公園に残る、巨大な伊能忠敬の銅像が完成したのは大正8年(1919)3月でした。大正6年の100年法要に銅像建立の機運が盛り上がり、町長をはじめ、有志が佐原町内はもとより全国に募金を呼びかけました。当初は銅像だけではなく、忠敬関係資料を陳列する施設の建設も計画されましたが実現はしませんでした。

銅像建立のために佐原町では600余名の人々、団体が寄付を行っています。展示ではその人名をすべて紹介しました。伊能忠敬の銅像は第二次世界大戦下の金属回収の嵐もくぐり抜け、残されてきました。今でも伊能忠敬を育んだ佐原のシンボルです。

佐原の人々と130年祭

戦後間もない昭和23年(1948)5月に佐原町では伊能忠敬130年祭が行われました。この事業は忠敬の顕彰だけではなく町民の多くが参加する文化祭として行われました。また佐原高校では忠敬関係資料の展示会が行われました。記念祭は100年目以来10年ごとに定期的に行われてきましたが、これほど規模の大きな行事は他にはありません。展示した写真は今から55年前の佐原の風景風俗を写したものです。

顕彰と資料

伊能忠敬の顕彰は具体的な資料にもとづくものでなければなりません。展示で紹介した写真は昭和25年(1950)伊能忠敬から五代目の当主の妻伊能孝さんが佐原の子供達と一緒に忠敬の資料を見ている姿です。このように忠敬の資料は伊能家の人々によって大切に守られてきました。昭和36年には忠敬関係資料は伊能家から佐原市に寄贈され、完成した伊能忠敬記念館で公開が行われるようになりました。記念館の建設は大正の銅像建立、戦後の130年祭以来の悲願達成であるとともに忠敬顕彰の恒常化のはじまりでした。

二六日で世界一周―世界を歩こう

渡辺 一郎

思い立った世界旅行

忠敬さんの没年を経過し、だんだんとスタミナの衰えを感じているなかで、未知の地域を探訪したい気持ちだけはなくならない。

若いころ、NTT本社の企画畑に勤務して、押せ押せドンドンの拡張時代を過ごしたので、視察のため国内各地はよく歩いた。在職中、年間三〇〇局にのぼる電話局の自動化を決定したことがあったが、いまでもそれら計画に計上した地名に出会うと、ここは郵政大臣のごり押しで入れたなとか、田中角栄さんの陳情があつたな、など大変懐かしく感じている。

卒業後は小さいながらもインターナショナルな会社の経営を担当したので、外国人のアレルギーはなく、横文字資料の扱いに抵抗はなかった。家内は、最初関心がなかったが、会社時代に、いつべんくらい行ってみると、娘と二人、香港の三泊四日の旅につれていった。

外国の旅は体験しなければ好きにはなれない。彼女はもともと好奇心が強いので病みつきになって、それから毎年出かけている。在職中は、料金の高い夏休みや年末年初しか行けなかったが、最近は料金の一番安いときを狙って出かけるようにしている。仕事以外の家族外遊は三九回に達した。

まだまだ行きたいところは沢山あるし、滞在してみたいところもある。しかし、元気のあるうちに遠いところから探訪しなくては、というようなことから、南米に行ってみようという話になった。

ブラジルのイズアスの滝を中心に、一周りと思ったのだが、まあまああのツアーをあたる、二週間くらいで六、七〇万円もする。ツアー会社の扱う旅にはグレードがあつて、安いことを売り物にする会社、すべてのクラスをカバーするデパート的な会社、個性ある旅を売り物にする会社と様々である。

料金は少し高いが、グレードの高いお客を相手にしている会社は、ニッコートラベル、ワールドトラベル、朝日旅行の「旅の中の旅」などである。前記の料金はこのクラスのツアー料金である。

南米まではロスアンゼルス経由で二四時間くらいかかる。ロスで一泊するツアーとしないツアーがあるが、この間、せまいエコノミー席に縛り付けられているのはしんどい。そうかといって、ビジネスクラスにすると一人百万円を軽く超える。これは高い。何か名案はないか。

そうなるとインターネット検索の登場である。ビジネスクラスのデスクアウトチケットを探しているうちに、ANAが海外の各社と提携して発行する世界一周航空券に気が付いた。伊能ウオークと同じに提携会社を廻つて、一筆書きで世界を一周できる。ビジネスクラスで五七万円である。これは安い。他に行きたいところもある、結婚四〇周年でもあるからやってみるか、世界一周旅行を計画した。

という経緯で、二〇〇二年の六月一三日から七月一八日まで三六日間の旅行が実現した。通算三七回目の家族個人旅行だった。旅先では失敗ばかりしていたが、少しでも会友諸姉に参考になりそうなことを記してみよう。

旅行日程のあらまし

コースは次のとおりである。出発前にフライトまですべて予約した。この航空券は出発便だけ予約すれば、あとはルートを確定すれば、一年間オープンであるから、フライトは予約しなくてもよい。制限距離内であれば、コース変更もできる。いわば、デスクアウト券ではなく、ノーマルな航空券である。しかし、現地での予約の面倒を避けるため、全ルートを予約した。それでも、トラブルは起こると思っていたが幸いに予約トラブルはなく、システムの精度には感心した。

- 第一日 成田からサンフランシスコ。全日空
- 第二日 英語のツアーでサンフランシスコ観光。ゴールデンゲートブリッジを渡る。
- 第三日 地下鉄でカリフォルニア大学バークレー校見学。市バスでオークランドベイブリッジ経由で帰る。
- 第四日 サンフランシスコロスアンゼルス。ユナイテッドの一等（ユナイテッドの国内線だけは一等に乗れる。実質ビジネスクラスと同じであるが）
ロスーサンパウロ。パリグ・ブラジル航空
前から噂には聞いていたが、パリグの機内サービスはよい。今回は六社のメジャー航空会社に搭乗したが最高だった。
- 第五日 サンパウロ着。日本人街を散策。何でもある。
- 第六日 美術館。大聖堂へ。
- 第七日 独立記念碑。パウリスタ博物館。
- 第八日 サンパウロ市内五時間観光。
- 第九日 サンパウロイグアス。パリグ・ブラジル航空
ここで大失敗したが、あとで記す。着後、目の前のイグ

アスの滝（ブラジル滝）を見物。

- 第一〇日 ブラジル滝再見。タクシーでアルゼンチン滝へ。
- 第一一日 イグアスーリオデジャネイロ。パリグ・ブラジル航空
- 第一二日 リオデジャネイロ半日観光。コロコバードの丘。
- 第一三日 地下鉄で、国立博、カンデリア教会など。
- 第一四日 リオデジャネイロアルゼンチンのブエノスアイレスへ。
ブラジル航空
- 第一五日 五月広場、港湾地区。
- 第一六日 日本庭園。レコレータ墓地。
- 第一七日 水郷テグレにゆき観光船に乗る。
- 第一八日 ブエノスーサンチャゴ（チリー）別途料金でランチりのエ
コノミーに。
- 第一九日 ダウンタウンめぐり。大聖堂。大統領府。
- 第二〇日 博物館めぐり。
- 第二一日 サンチャゴーリマ（ペルー）別途料金でランチリ。
- 第二二日 タクシーで市内見物（日本語が少し分かる運転手）
- 第二三日 黄金博物館、天野博物館。日本人学芸員に会う。
- 第二四日 リマーサンチャゴーブエノスアイレス。講談社の「再現日本史」伊能忠敬の原稿の最終校正刷りを受信。すぐF A
Xする。
- 第二五日 午前散策。午後バスで空港へ。ブエノスーフランクフルトへ。ルフトハンザ航空
- 第二六日 フランクフルト着。はじめての大西洋横断は大分揺れた。
- 第二七日 列車でルクセンブルグへ。ルクセンブルグ国際銀行訪問。
歓迎された。
- 第二八日 ケルン、ボン、ベートーペンの生家など訪問。

第二九日 フランクーダブリン。プリティッシュミッドランド航空。

第三〇日 観光バスで市内一巡。

第三一日 マラハイト城、コーストライン観光、空港内ホテルに。

第三二日 ダブリンからコペンハーゲン。ルフトハンザ航空

アイスランドのレイキャビックへ。アイスランド航空

アイスランド航空もエコノミーを別途購入した。

第三三日 乗り放題券を買って市内を散策。レイキャビック大学、

カルチャーセンターなど。

第三四日 ブルーラグーン温泉観光など六時間コース。

第三五日 レイキャビック・コペン。コペンハーゲン・成田。

スカンジナビヤ航空

第三六日 成田到着

いろいろな航空会社を使ってみようという計画したが、ビジネスクラスの機内サービスは、パリグ航空、SAS、ANA、ルフトハンザ、プリティッシュミッドランド、ユナイテッドの順だった。ラウンジ、トランジットのサービス扱いは、SASが断然よかった。

このチケットは航空会社内ではDクラスと呼ばれ、正規のビジネス運賃を払ったCクラスとは予約、座席などで若干の差があるらしいが、席も悪くはなかったし差を感じることは全くなかった。

総費用は、私が食事制限（蛋白質の日量四〇グラム、アルコールは制限なし）を受けていて、残念ながら美味美食の賞味ができないせいもあって、飛行機はビジネスクラス（ローカル線を除く）、ホテルはすべて四つ星以上としたが、二人で二五〇万円くらいだった。ツアーに比べれば超割安である。そのかわり、準備には大変な時間を費やした。

コース、日程をきめて航空券を申し込む。予約まで完結するのに二週間以上かかった。

旅で出会った様々なこと

ホテルの予約 ホテルはすべてインターネットで予約したが、トラブルは一件もなかった。日本の旅行サイトに申し込むと、送金を要求されるが、外国のサイトはカード番号を知らせて、ギャランTEE・リザベーションをするだけで至極簡単である。

したがって大部分、インターネット経由アメリカの予約システムを利用した。ホテルの部屋の種類内容まで眺めて予約ができる。数ヶ月前からはじめたので、一流ホテルのスペシャル・デスクアウントが狙い目だった。恐ろしく安いのである。

その仕組みはこうである。彼らは商売なので、普通にやっていたら発生する空室はわかっている。この部分を埋めるために、インターネットに超安値を表示して私のようなフリーの客を呼ぶらしい。

例えば、フランクフルトのシエラトンで、一〇〇ドルを切ったオフアアが出ていた。大丈夫かなというような料金である。そのかわり、予約するとすぐ、カード会社に請求が出ることを承知しなければならぬ。キャンセル、変更はすべて有料で二〇ドル取られる。

この特別価格は、あったことを確かめて、他を調べてから再度アクセスするとなくなったりするから、狙っている人はいるのだろう。

カリフォルニア大学バークレーどこに行こうか、まではとても日本にいる間には検討できなかった。着いてから現地の案内など見てきめる。サンフランシスコは、二〇年も前に、ひとりりで歩いたことがあるので、

多少土地勘はあった。観光のあと、これまでに行っていない、パークレーに行くことにした。個人旅行のときは、ホテルは市の中心を選ぶので、地下鉄で行けることがわかる。

キャンパスは広大で清潔。日本の大学のように汚くない。学内の博物館、図書館は誰でも入れる。名物の時計塔はエレベーターが故障であがれなかった。

学生街はどこにあるのかと、学生会館の方についてみると、びっくりした。大学のすぐ隣は喧騒な若者の町であった。清潔なキャンパスと盛り場が隣り合わせで共存している。サンフランシスコへのバスもここから発車する。

帰りはバスにして、オークランドブリッジをわたろうかと考え、一時間一本のバスを待った。運転手はチャイニーズで、お客は一〇人はいなかった。日本と同じに次の停留場で降りるひとはブザーを押してバスを停めてもらう。

乗客は次第に降りて、オークランドブリッジを渡るときは、我々二人だけだった。すばらしい市街の眺めを満喫しながら、専用車の気分だった。

サンパウロの日本人街 サンパウロには大日本人街があると聞いていたので行ってみてびっくりした。商店がずらりと並んでなんでもある。米袋が店頭に山積みになっており、海苔巻き、アンパン、大福、すあま、など日本食品がなんでもある。書店には日本の本や雑誌がたくさん並んでいる。海外では最大の日本人町ではないかと感じた。

イグアス空港と違って違う空港に着く、サンパウロから世界三大名滝のイグアスの滝に行くため、イグアス空港につき、荷物を待っていた

が最後まで出てこなかった。仲間が数人いたが、荷物係にクレームにゆくと、「ここはクリチバで、イグアスではない。あなたは飛行機を間違えたのだ」といわれた。

これにはびっくり仰天した。飛行機にはずいぶん乗ったがこんなことはなかった。周囲の人は驚くし、さてどうしたものかと閉口した。係員の女性は「ドンマイ、ドンマイ。少し待ってください。イグアスに送り届けるから」という。

「荷物はどうなっている」電話したら、イグアスに着いているとのこと。全くあきれた話である。違う空港に着いたのだが少しも疑問を持たず、最後までわからなかったのである。

サンパウロの空港で指定されたゲートで飛行機を待っていた。フライトの掲示は全く無くて、アナウンスは分からなかった。ゲートの係員にチケットを見せて、ここで待てばよいのかと聞いたが、よいという。搭乗のときは半券を切る。ここでも本来ならチェックすべきであるが、何もいわれなかった。搭乗後座席でスチュアーデスに、チケットを見せて、ここでよいかと聞いてOKをもらっている。

三回も確認したのだから、私は少しも疑問を持たなかった。ところが、別の飛行機に乗ってしまった。チェックが少しも働かなかったということである。ブラジル人のいい加減さ、といってしまうそれまでであるが、ひどい話だった。重客数の確認など全くしてないということである。この点、バリの安全面は要注意である。

この話の後は整然と処理され、笑い話で済むことになった。係員は不達荷物の手配を終わると、私たちをチェックイン・カウンターに連れてゆき、係に事情説明する。カウンターではすぐ便を調べて、直近

の他社便を探し出した。

その会社のカウンターへ行ってイグアスへの発券を依頼する。長い説明なしに、すぐ航空券が入手できた。ただし、ビジネス券ではなくエコノミー券だった。航空会社間ではこんなときに相互に応援する約束が出来ているらしい。係員は皆丁寧だった。こういうときは、ビジネスクラスは物をいうのかも知れない。イグアスについて荷物係にいくと、話を知っていて笑いながら荷物を渡してくれた。



ブラジル側イグアスの滝の迫力。滝壺のすぐ近くまで行ける。アルゼンチン側の方が技巧的である。

イグアスの滝 滝の直

前のカトラタスホテルを取ったので、ブラジル滝は目の前だった。川沿いの小径を進んで滝のすぐ近くまで行く。滝つぼに向かって張り出した栈橋があつて、雨合羽を着た観光客が進む。そこまでしなくても展望台に登って滝の全景をみる。

ナイヤガラも見たが、どちらともいいがたい。

遙かな対岸ではアルゼンチン側から滝を眺める人々が見受けられる。翌日は、やっぱり行ってみようという滝つぼへの栈橋を

歩く。予想以上のしぶきで、びしょぬれになってしまった。

アルゼンチン滝へ

公園地域はマイカー乗り入れ禁止で、バス移動となつているが、ターミナルまで出かけてみた。インフォメーションがあつたので、何となくアルゼンチン滝のことを聞いてみたら、公共バスでゆけますよ。行って御覧なさいといわれ、つい、その気になる。

教えられたバスに乗る。ブラジルのバスは、運転席の他に座席の入り口に車掌席があつて車掌さんが座っている。ここでお金を払って座席のあるコーナーに進む。お客は数人しかいないのにお金を取るだけに一人座っている。無駄なことだと思ふが、これは文化の違いというべきであろうか。

アルゼンチンに向かうインターナショナルバスの乗り換え場所でおろしてもらい、次のバスを待つ。寂しい場所で壊れた待ち合わせ所があるばかりの道端である。

少し寂しい感じがする。すると見透かしたようにタクシーがやってきて、乗車を薦める。アルゼンチン滝まで五〇USドルだという。高いのか安いのか片道か、往復かわからないから、ノーである。

しばらくすると、また、運転手らしくない品のいい人が話しかけてきた。日本人か。どこから来た。お決まりの問いかけである。しかし、この人も運転手だった。アルゼンチン滝まで往復で四〇ドル、滝の案内もすると。品のいい人だったので、頼むことにした。

アルゼンチン、ブラジル、パラグアイの国境を眺める橋、アルゼンチンの入国管理、公園内専用のトロッコ列車、を乗り継ぎ、川の上に延々と設けられた栈橋をニキロも歩いてアルゼンチン滝展望所に着く。滝の上に乗りに出して見ているようなものだった。

帰路は逆順で、周囲の小公園、小径を歩きながらもどる。話を聞く

と、この運転手は、定年までカトラタスホテルのフロントマネージャーをしていたそうである。

当然だが、顔が広くて、日本人ガイドも良く知っていた。日本人ガイドに出逢うと、我々に日本語で説明してあげてくれ、と頼んで話をきくことができた。

ある老日本人ガイドに出合ったとき、よく英語もわからずに、単独旅行する我々老夫婦を見て何を思ったか、自分が連れてきている日本人客を待たせて、身の上話をされたことがある。

二〇台のとき、ブラジルへ来て四〇年、色々あったが、こうして元気で働いている。妻は一〇歳も年上だがガイドをしている。ありがたいことだ。何といつても、日本人は金を持っている。としきりに日本を持ち上げていた。

また、四〇年間に日本に五回も帰ったと自慢そうな口振りだった。最初の頃はお金がなくてとても帰れなかったが、最近ではよくなった。ブラジルに来てよかったと、今の境遇に満足そうな顔だった。

政治家でも、役人でもない私たちに、何でこんな述懐をしたのかは、今でもわからない。いいガイドをつけていて結構だともいった。四〇年間に五回の里帰りなんて少ないな、と思うが、こちらではそうではないらしい。成功者ということのようである。

帰路はバスに乗り換えて帰るのは大変だなと思っていたら、運転手が、もう一〇ドル出せばホテルまで送る、といいだした。大分、丁寧に案内させたので、チップをやらなければと思っていたから丁度いい。誘いに乗って帰った。

(つづく)

ゼンリン「地図の資料館」がオープン 北九州市

地図製作で有名な株式会社ゼンリン（本社・福岡県北九州市）が、JR小倉駅近くの大型再開発ビル「リバーウオーク北九州」に本社を移転。本社内に、創業者大迫会長のコレクションを一般に公開するため「地図の資料館」が開設された。館内には、古地図等のほか、特に伊能図を大きく取り上げて展示している。地図の上を歩けるそうです。お近くにおいでの際はぜひ一度お立ち寄りください。TEL 093-592-9082

伊能忠敬の地図歩こう



伊能図の上を歩こう。ゼンリンは十五日、北九州（北九州市）の倉敷区内に開館する地図の資料館を公開した。

ゼンリン、北九州に資料館 実物大複製図、床に展示

江戸時代に伊能忠敬が歩いて、彼の足跡をたどる「伊能忠敬の地図歩こう」が、北九州市の倉敷区にある「伊能忠敬の地図の資料館」で展示されている。この資料館は、伊能忠敬の測量した実物大複製図を床に展示している。当時のペルシオン市街の地図も展示されている。伊能忠敬が測量した地図は、現在でも貴重な資料として大切に保管されている。この資料館は、伊能忠敬の測量した実物大複製図を床に展示している。当時のペルシオン市街の地図も展示されている。伊能忠敬が測量した地図は、現在でも貴重な資料として大切に保管されている。

日本経済新聞 7月16日

ゼンリンさんから：（抄録）日本における地図作りの原点は、歩いて日本を巡り、当時として世界最高レベルの測量、編集技術で日本地図を完成させた伊能忠敬です。伊能忠敬は、小倉・紫川にかかる常盤橋を九州の起点としました。伊能忠敬とその測量隊が作った中図で、地図作りの苦労や情熱を想像してください。地図の背景にある歴史、文化を感じていただきたいと思います。（石川清一さん提供）

フランスのナンシーで見た象限儀 渡辺 一郎



平成一五年に予定されている「アメリカ大図展」に出展のため、フランスの伊能中図を借用のお願いに、イブ・ペイレ夫妻を訪問し、ついでに、フランス各地を漫歩してきたが、たまたまナンシーの、大公の館に設けられ歴史博物館で伊能測量と同じような象限儀を発見した。御承知のようにナンシーはアールヌーボー発祥の若者の町で、街中

がハイカラな装飾、デザインに溢れているが、そういう場所の博物館でクラシクな観測器具に出会うのも何かの因縁である。

撮影禁止だったが、内緒で撮ってきた写真である。原理は忠敬の象限儀と同じで、望遠鏡で星を捉え、そのときの高度を測るらしい。フランス語の説明を撮影してきたが、現像したらピンボケで読めなかった。だから説明はわからない。

忠敬の象限儀との大きな違いは、望遠鏡が四半円の一边に固定されていることである。望遠鏡を星に合わせると四半円も一緒に動くようになっていて、四半円を支える支柱は四半円の腕木に取り付けられていて、円の中心ではない。

したがって、垂直の支持棒と四半円の交点は一固定ではなく、仰角につれて移動する。ここに目盛があつて、高度が計測できる。

望遠鏡の材質は真鍮、半径一メートルくらいの四半円は木製で、周囲に真鍮の目盛盤が付いている。九七・五度まで目盛があつて一度は六分割されていた。一目盛一〇分を副尺で一〇分割し、一分まで正確に読みとることができる。年代は、Expoque 1762とあつた。

全体が小ぶりなので、軽量のようなのである。これなら、たぶん、一人で畳んで持ち運びが出来るようである。



支部便り

たかが歩きされど歩き・九州支部春期例会

原口 光和

6月28日(土)さざんびあ博多(福岡市博多南地域交流センター)にて春期例会が開催された。石川支部長から本部総会報告、九州支部報告、新会員紹介(田中氏・穂吉氏)があり、来賓として国土地理院九州地方測量部長根本氏のスピーチと続いた。講演は次の三氏に。

一 中島豪氏 「たかが歩き、されど歩き、夢12年」

76歳ギネス挑戦全記録の詳細説明は圧巻であった。大正12年生まれの中島氏は陸上自衛隊退官後、工場勤務中に労災事故で腰椎骨折、寝たきり後にリハビリを始め二万歩歩行が可能になった頃から日本一周の夢が募り、体力と装備の準備を重ねていった。

一九九四年の四国から始まり、徐々に距離を伸ばし、オーストラリア人男性が作った331日で12,000⁺の記録に挑戦!第一次から第五次まで総計3326日13,040⁺を歩きギネス記録を破った!一日43⁺、三分の一が野宿、22足の靴を履きつぶした原動力は「今じゃないと出来ない」「俺じゃないと出来ない」という陸士卒の強い意地と誇りがあったからこそ。まさしく人生は賭であり、災い転じて福となす発想。自費一千万円を投入し、「日の出から日没まで」を鉄則とした中島氏の行動は伊能忠敬にも通じるものであり、日本地図を広げでの説明に会員各位からも質問続出、まさに平成の伊能忠敬でありました。

二 松尾紀成氏(長崎街道研究家)・多良街道(長崎脇街道)について

肥前松浦での伊能測量隊の詳細説明があり、熱心な質疑応答が繰り返された。

返されたが、脇街道と証するに値する街道地図が提供され松尾氏の研究家ぶりが証明された。

三 田中邦博氏(九州共立大学助教授)「私と伊能忠敬との出会い」

田中氏は本年一月の入会であるが、専門は地盤工学・土木工学。インターネットで検索していく中で当研究会のことを知り会員となられたが、恐らく伊能忠敬も根底には測量が好きであった事を思料すると今後のインターネットでの参加者増大が期待される場所でもある。

以上のように、休息を挟みながら密度の高い興味深い話が時間を忘れさせた。本年度の研究旅行は大阪と長崎が検討されていたが、長崎市立博物館での収蔵物、大村藩測量係りの峰源助筆写の伊能図見学と決定した。

その後、所を変えタクシーで移動。場所は「対馬」。店に飾られている写真は、対馬最北端から僅か48⁺の韓国・釜山の夜景!本当に国境に近い町対馬。伊能忠敬も、尽きせぬ日本各地への思いを胸に抱きながら旅を続けたのであろうと、酒席はもりあがるばかりであった。

(はらぐち みつかず・大野城市)



九州支部例会のスナップから

忠敬談話室だより

□「地図展2003さいたま」が11月に開催

国土地理院ほか主催の今年の地図展はさいたま市大宮ソニックシティで11月13日から17日まで開かれます。お近くの方はぜひお出かけ下さい。さいたま市の過去から現在そして未来につながる都市の発展を



九州支部のみなさん 後列左から井上、田中、本田、中富、原口、野田
前列は松尾(紀)、河島、石川、根本(国土地理院)、橋吉の各氏

■出土した餅焼き網 9頁『お餅が大好き「はざまさん」』続報！

関西大学理事長羽間平安氏に伺いました。

『餅焼き網』は間重富が使っていた「眼鏡」と「コンパス」と三点セットで出土したものです。(理事長は「出土」と言いました)。

単に出土したということであって本人が餅好きであったかどうかは実際に餅を焼いているのを見たわけではないから(笑)分かりません。その餅網は使ったあとが歴然としていられることもあり、上田じよう先生などがいろいろ研究されて「間重富は餅が好き」という説を唱えてそれが流布している。

私の姉の浜本は大阪府女専(今の大阪大学)を出て先生をしていたのでちよつとした学者で、魚住さうごろう先生に師事したりして、私よりもよほど勉強している。姉は上田先生とも昵懇で、その関係で「重富は餅好き」と言ったのだと思う。いずれ誰も本人が餅を焼いているところを見たわけではないのだが、日常生活に不可欠の「眼鏡」や、当時貴重であった「コンパス」などと一緒に大切に保管されてきたということは、本人にとつて重要なものであったと想像するに難くなく(死んだ私の父親が酒を呑むための盃や徳利を大事にしていたと同じようなもので、「餅好き」ということになっている)。

私の家では母親も私も餅が好きでよく焼いて食べていましたが(笑)、これは私の家で一種の迷信のようなものかもしれません。』

(前田幸子)

測量と地図の技術を通じて紹介されます。アメリカ大図のうち関東地方の大図が公開され、立正大学地球環境科学部協力「彩の国環境地図作品展」などを中心に子供から大人まで楽しめる企画がたくさんです。

伊能忠敬研究会 御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
- 二、つぎのような活動をおこなっております。

① 会報の発行

— 予定 —

発表誌 原則として年四回 64頁

第35号締切11月末 発行1月

② 例会・見学会の開催

第36号締切2月末 発行4月

③ 忠敬関連イベントの主催または共催

第37号締切5月末 発行7月

④ その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

送金先

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七二八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四〜八頁です。越える場合は分載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書齋、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

編集後記

待望の伊能図公開が始まります。◇何気ない出会いに秘められた歴史がありました。大阪旅行で実見です。◇今号の忠誨日記に出てきた「曆象考成・後編」をわが手で頁をめくることができました。大阪市立科学館での出来事です。◇第二巻の最初に雍正八年と書かれている。これを見た伊藤さんがすぐその場で解説を。「これは清国の年号で日本では享保一五年、一七三〇年ですね」と。すごい智力に感心。またひとつ新しい知恵を授かりました。◇前号で景利収集品の中に六十六部修験者より受けた石があったことから、東京・世田谷の一人出版社、岩田書院の本で巡礼研究会の存在を知りました。◇後世への文化を守る活動には多くの善意に多分の財力も必要でしょう。独立行政法人など組織活動に支援の眼が集れば。◇有馬温泉のお湯は忠敬さんの泊まった晩も、先日の一夜もこんこんと湧いていました。来年は地震、火事、津波、台風など災害に充分な備えで済めばよしと願うこのころ。(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.34 2003



HOT NEWS

Inoh Maps returned from U.S! :

"Tadataka Inoh and Maps of Japan"

:Tokyo National Museum

Continue Familiar Association Inoh and Hazama Family

Report : The Inoh Tadataka Society Study Tour to Osaka

Muruyoi-Temple and Episode of Japanese Persimmon Tree

	1
	4
Shinzawa Yoshihiro	6
Ogiwara Tetsuo	10

MATERIALS

Reading Documents in "Seimonkinkyoruiroku" (1)

Tadataka and a Classical Chinese Poem

Tadataka Inoh and the Chizu Road in Tottori

Kojima Kazuhito	14
Ito Eiko	18
Tanaka Yoshio	24

FROM VISITORS' RESISTERS

Inoh Yoko	21
-----------	----

TOPICS

My Friendly Person "Walking"

Best clear Copy of Tadataka's Epitaph at Genkuji-Temple

New Inoh Family Documents exhibit

Old Quadrant in Nancy historical museum

Tanaka Hisayoshi	17
Inoh Yoko	32
Inoh Tadataka	
Memorial Museum	54
Watanabe Ichiro	62

REGIONAL MATERIALS

Documents of Village official followed after Inoh team

Inoh Tadanori Diary (3)

Kawashima Etsuko	36
Sakuma Tatsuo	46

ESSAY

36Days World Around Individual Trip

Watanabe Ichiro	56
-----------------	----

BRANCH REPORT

Kyushu Branch : "Just walking . But walking"

Haraguchi Mitsukazu	63
---------------------	----

MEETING ROOM

Editorial Department	64
----------------------	----

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY